

監獄勇者のやり直し

貶められた最強の英雄は500年後の世界を自由に生きる

瀬尾つかさ



ファンタジア文庫

2892

CONTENTS

THE IMMORTAL HERO TO BE LOOKED DOWN UPON LIVES
FREELY IN THE WORLD AFTER 500 YEARS ◆◆◆◆◆

第一話 監獄城の剣聖勇者

005

第二話 五百年後の世界

041

第三話 シルダリ教国

128

第四話 聖女ミル

179

エピソード一

274

星の命の眠るところ

292

エピソード二

300

あとがき

303

書き下ろし特別ショートストーリー 港町にて

307

THE REVENGE OF PRISON HERO

口絵・本文イラスト
平井ゆづき

第一話 監獄城の剣聖勇者

大陸を蹂躪し人類を恐怖のどん底に追い込んだ邪竜アイシヤザック。

それを滅ぼしたのが、おれたち七人の勇者だ。

大陸を救ったおれたちだが、ハッピーエンドとは、ならなかった。

帝国に凱旋した直後、おれたちはバラバラに引き離された。

そして、おれ。若くして当代最強の剣聖と謳われたコガネは、身に覚えのない謀反の罪で拘束されたのである。

「反逆者コガネを、無期幽閉刑に処する」

皇帝の勅旨により、悪名高い監獄城の最上階に幽閉された。靈気を封じる刻印の描かれた魔導具、封印鎖で、その身を何重にも縛られて。臂力にはちよつと自信のあったおれが、いくらちからを込めても壊せないほど頑丈に、ぐるぐる巻きにされて。

「コガネ。おまえは、もう用済みなのだよ」

おれを勇者のひとりとして取り立ててくれた第一皇子が、牢の扉の向こう側で告げる。

きみこそが大陸最強であると肩を叩いてくれたその舌が、おれを「用済み」という。あざ笑っているわけでもなく、悲しんでいるわけでもなく、淡々とした口調なのがいいそう、おそろしい。

「ユーフエリアとの婚約は破棄だ。あれはほかの貴族のところに降嫁させる」
出世欲がなかったかといえば、嘘になる。

それ以上に、おれは第七皇女であるユーフエリアさまに惚れていた。孤児院出身のおれが彼女にふさわしい男となるには、でかい功績が必要だった。

普通の者ならば、絶対に不可能な功績をあげる必要があった。

おれにとつては、それが邪竜退治だったのだ。仲間にも恵まれ、おれは前人未至のその偉業を達成した、のだが……。

その結果が、これか。

帝国に奉仕し続けた男の末路が、これなのか。

「処刑できるなら、したかったのだがね。邪竜の血を浴びたおまえたちは、殺すこともできない」

拘束されてから、苛烈な拷問を受けた。

しかし、どれほどの怪我也、あつという間に治癒してしまう。

試しにと心臓を杭で撃ち貫かれたが、十を数える間に杭が抜け落ち、胸の傷はあともなく消えてしまったほどである。

思い出すのは、邪竜の断末魔の声と、あのとき周囲にばらまかれた膨大な霊気、そしてそれらをともに浴びてしまった仲間たちの姿だ。

神に達しようかというほど高められた竜の血は、脆弱な下等種に呪いと恩恵を与えると伝承は伝える。

結果、おれたちは死のうとしても死ねない身体となつてしまったようだった。

「なぜ」

おれはひとことだけ、第一皇子に問うた。

いいたいことは山ほどあったが、口にしても無駄だとわかっている。それでも、ひとことだけ、訊ねたかった。

「おれを始末する必要があった」

「預言があった。帝国にとって、過ぎたるちからは騒乱の火種となると。邪竜を打ち倒した七人の勇者は、いずれ帝国を滅ぼすだろうと」

「預言？ いったい、誰が」

教会の神託であれば、仲間のひとりであるミル、聖女と謳われた彼女に伝わらないはず

がない。

もしや、ミルが裏切ったということは……。

いや、彼女に限って、それはないだろう。

第一皇子は無言だった。ブーツの足音が、牢から遠ざかっていく。通路の先で、重い鉄扉が締まる音が響く。

次にあの扉が開くときは、はたして来るのだろうか。

ひとつきりの狭い窓から差し込む陽の光だけが、昼夜を区別する手段だ。いまのおれには、水も食べ物も必要ない。

仲間たちは、どうなったのだろうか。おれの身に起こったことを考えれば、おのずと予想はできるが……。

「ミルだけは、教会が動いて確保したって話だったか」

彼女は、教会を代表する聖女だ。いくら大陸を支配する帝国といえど、教会権力に逆らうことはできないだろう。

せめて彼女だけでも無事であってくれと、心から願う。

おれはあぐらをかき、目をつぶる。呼吸を整え、瞑想する。大気に交じる微量の靈気を少しずつ吸収していく。

いまやれることは、これくらいしかなかった。無意味とわかっていても、暇をつぶせばそれでよかった。

時間だけは、山ほどあるはずだった。

一昼夜が経ったところ。

ふたたび、通路の鉄扉の開く音がする。意外なことだな、とおれは眉をつりあげた。用がある者など、もう誰ひとりとして存在しないはずだ。

おれは天涯孤獨の身の上で、財も名誉もすべて失った。偽りの罪状で何重にも貶められ、政治的な利用価値もない。

その、はずだったのだが……。

牢の扉の向こう側から聞こえてきたのは、若い女性の声だった。

その声の主のことは、よく知っていた。

「ユーフェリアさま」

思わず、呼びかけていた。

第七皇女ユーフェリア。

おれの婚約者だった、今年で十六になる少女である。

だがいまや婚約は解消され、赤の他人となったはず。帝都から離れた監獄城にあるこの牢まで、わざわざ足を伸ばす理由など、なにひとつないはず。

「ごめんなさい。ごめんなさい、コガネ」

少女は、泣きながら謝罪した。

なんども、なんども、謝り続けた。自分のちからが足りなかった、いや自分にはなんのちからもないのだと、嘆き続けた。

あげくに、牢の扉を無理にでも開けようとして、お目つけ役の男たちに取り押さえられる始末だった。

おれと彼女を隔てる扉には、頑丈な鍵がかかっている。封印の魔導具という、特殊な魔術師でなければ開けない魔導具を用いた扉であると説明されていた。

厳密には、部屋全体が魔導具による結果で覆われているのだという。よって壁を破壊するようなこともできないのだと。

「わたしは諦めません。手を尽くします。あなたに着せられた偽りの罪を晴らし、この牢から出すためなら、なんだってしてみせましょう」

少女はそう誓い、立ち去った。通路の鉄扉の閉じる音が響く。

数日後、彼女はふたたびやってきた。

なんの進展もなかった、どころか彼女の手からあらゆる権限がとり上げられ、身動きがでなくなってしまうという。

彼女をさっさと降嫁させるべく、準備が進んでいるとも。

「ごめんなさい。ごめんなさい、コガネ。無力なわたしを許してください」

なんどもなんども、少女は謝罪する。

「愛しています、コガネ。この先、なにがあっても。ずっと」

なにを、いまさら。

やめてくれ、と叫んだ。おれのことなんてさっさと忘れてくれと。

少女は、また来ると約束して去っていった。けっして諦めない。希望を捨てないでくれと。

希望など、なかった。報告のたびに、少女は打ちひしがれた声で謝罪した。彼女が悲しむのは、自らの身体に鞭うたれるより堪えた。

「もういい」

おれはなんども、そういった。

だがユーフェリアは、魍魎ちみりやう魍魎やうが跋扈はつこする宮廷きやうていでただひとり、果敢かかんに戦い続ける覚悟かくこを示した。そんなことをしても無駄なところか、余計に皇帝や貴族たちの反感を買うだけだというのに。

「だって、コガネ。あなたがたのおかげで、国が、大陸が救われたのですよ」

それが政治なのだ、と彼女もわかっているはずだった。

それでも、ユーフェリアは諦めなかった。

いつか終わりのときは来る。

あるとき、彼女は憔悴しょうさいしきった声で告げた。

「ごめんなさい」

もう無理だと、もうダメなのだと、ただそのひとことでおれは理解してしまった。彼女の心は、ついに折れてしまったのだと。

これでいい、と思った。

無駄な努力でこれ以上、彼女の人生まで台無しにしくなかつた。

「三日後、わたしの婚約が発表されます。ここに頻繁ひんぱんに来ることは、もうできないでしょう」

「もういい。二度と来るな」

ぶつきらばうに、突き放した。

なんとも不器用なことだなと、口もとを歪ゆがめる。

おれも、彼女かのじょも、愚かおろかなと。

別れのとき、彼女は泣かなかつた。きつと、もう涙なみだは涸かれ尽くしたのだろう。

鉄扉てつひが閉まる音を黙だまって聞いた。

時が、経った。

食事はしじも排泄はいちもなく、おれはただ生きていた。不老不死になるとは、そういうことだ。夜になり、朝が来て、また夜が来る。

あるとき、鉄扉てつひがきしんだ音を立てて開いた。ひとり、通路を歩いてくる。足音だけで、ユーフェリアだとわかつた。

「一年も来られなくて、ごめんなさい」

いつだって彼女は、ごめんなさいから始める。実際のところ、明るい話題などひとつもないのはわかっているのだけれど。

「結婚、いたしました」

相手の伯爵の名前は、おれでも知っていた。

爵位を継いだばかりで、まだ二十代の前半だったはずだ。性格も悪くはなかったはず。おおむね、いい婚姻だろう。

彼女は短い報告だけして、去っていった。

それでいい、と思った。

おれだって、そんな報告を長々と聞きたくはなかった。

「子どもが生まれました」

二年後、そう報告された。

「ふたりめが生まれました」

翌年にはそう報告された。

けつきよく、彼女は四人の子どもを産んだ。貴族の夫人として、たいへんけつこうなことをだと思う。

「父が、皇帝陛下が、亡くなりました。兄たちが激しく争っています」

おれが幽閉されてから五年以上が経過したころ、ユーフェリアはそんな報告をしてきた。

聞けば皇帝は暗殺されて、遺言はなく、現在は六人の皇子たちが睨み合っているという。それ以外の皇位継承権持ちも、虎視眈々と皇帝の座を狙っているとか。

暗殺や粛清で、帝都は血の雨が降っているらしい。

いまとなってみると、降嫁、というのはよい判断だったといえる。

継承権がなくなったユーフェリアは安全とのことだ。

夫の伯爵が立ちまわりに気をつけていればの話なのだが……。

幸いにして、いまのところ火の粉をかぶらない立ち位置にしているとのこと。

「くれぐれも」

とおれは告げる。

「この騒ぎに乗じておれを解放しよう、などと考えないでください。どうか、御身を大事に」

ユーフェリアは黙った。

釘を刺しておいて正解だったようだ。おれは、重ねて彼女に自重を促した。

皇子たちの争いは行くところまで行って、帝国は割れた。

その隙にと、辺境の各国が独立を宣言する。

こうして、大陸の覇者としての帝国は、あっけなく消え去った。

「預言は外れたな。おれたち勇者なんて関係なく、帝国は滅びたか」

皇帝の崩御からここまで、わずか三年である。

ユーフェリアはこの隙におれを牢から出すべく画策しようだが、徒勞に終わった。帝都を占拠する第一皇子が、おれのことを特に警戒しているとのことだ。

彼を恨んでいないかといえば、当然、恨みはある。

敵にまわらないかといわれると、そりゃまあ、ためらいもなく復讐に行くだろう。彼の懸念は当然だった。

制約の魔術などによる思考制御は、竜の靈氣をとりこんだいまのおれに対して無意味だった。

そのあたりは、拷問されたときに判明していた。なにものも、おれを操ることはできない。ゆえにいつそう、おれたちは危険視されたのだ。

「もういちど、兄を説得してみます」

「やりすぎると、あなたの身にも危険が及ぶかもしれない。いや、あなたの子どもにまでその手が及ぶ可能性もある」

子どものことを持ち出すと、さすがのユーフェリアも沈黙せざるを得なかった。それで

も、やれるだけのことはやるというて、彼女は出ていく。

歳月は飛ぶように流れた。

「ごめんなさい」

ユーフェリアはいつだって、謝罪の言葉から入る。その声が、しわがれていることに気づいた。

彼女の口から告げられたのは、「あれから十七年が経ちました」という言葉だった。

「相次ぐ戦いで、辺境に避難せざるを得なかったのです。帝都は荒れ果て、長く、立ち入ることもできませんでした」

今回、彼女は危険を冒して、少数でこの監獄城へ侵入したのだという。

ただ、牢の扉を開けることができる魔術師の一族は、帝国でも秘中の秘であつたらしい。

封印の魔導具を破ることができる魔術師の一族は、帝国でも秘中の秘であつたらしい。彼らの多くは、長引く戦乱で行方がわからなくなつてしまった。

居場所が判明している一部の者も各勢力の紐つきで、ユーフェリアには手が出せないのだという。この牢の扉を開くことは、現状、絶望的ということだ。

「ようやく、お兄さまもいなくなったというのに」

ユーフェリアは嘆く。
聞けば第一皇子は、傲慢で傍若無人に戦禍を広げ続けたすえ、愛妾に寝首をかかれたことだ。

おれをこんな境遇に追い込んだ宿敵の情けない最期に、肩透かしを食らってしまった気分である。

ユーフェリアは、咳をした。

肺を患っているという。きつと、もう長くはないだろうと冷静に告げる。

「もはやわたしは、従者たちの支えがなければ階段を登ることすらできません」
無理をしないでくれ、とおれはいった。

心からの懇願だった。

ユーフェリアは、笑っただけだった。

「もう、ここに来ることは難しいでしょう。この扉をわたしの手で開けることはできません」
でしよう。ただ、ひとつだけ。わたしは、希望を残すことができます」

扉に、この部屋全体にかけられた封印は、次第にちからを失っていくという。

おれの牢にかけられた封印も、いつかは消えるだろう、と。それが何十年後か、それとも何百年後かは、わからないが……。

「わたしは、己の子らの子らに言伝を残します。いつの日か、必ずや、この牢を開きあなたを解放するようにと」
はたして、いつになることだろう。

そのとき彼女の言伝を覚えている者はいるだろうか。

だが、まあ……まったくなんの希望もなく、この部屋で永遠の時間を生きるのでは、あまりにも救いがない。

「期待している」

だからおれは、そういった。

ユーフェリアが、ちから強く、「はい！」と返事をする。そのときだけ、彼女の声はあの無垢な少女だったころのように生き生きとしていた。

「さようなら、コガネ。いつの日か、あなたがこの牢獄から解放されますように」
その言葉を最後に、ユーフェリアは去っていった。

もう二度と。彼女は戻ってこなかった。

おれは、目を閉じた。

考える。おれは、おれたちは、いったいなにを間違えたのだろう。

孤児院で生まれ、虐げられ踏みにじられる側にはなりたくないと、必死で鍛えた。弱者を守る者になりたいと、そう願った。

大陸でも最強の一角になったおれは、大陸の民のために、帝国のために、おれの大切なひとたちのために、戦ったはずだった。

その結果が、これか。

強者になったと思っていたが、いまだおれは、弱者であつたのか。

では、どうすればもつと強者になれたのか。

仙者、と呼ばれていた隠遁の老人の言葉を思い出す。

大気に霊の気あり、大気に地の気あり、大気に星の気あり。大気からそれらを取り込み、己のものとせよ。

かの者のもつて修行して、おれは劍聖としてのちからを得た。山を下りるとき、まだ未熟といわれた。下界でも修行を続けよ、と。

深く深く霊気を取り込むための特殊な瞑想というものを、彼は教えてくれた。何百年という瞑想の果てに至る境地があるのだと、彼はいつた。

ヒトの寿命はそれほど長くない、とそのときのおれは笑い飛ばしたのだ。

幸いにして、いまのおれには時間だけはある。

おれは瞑想を再開した。

仙者の言葉を思い出しながら、深く深く、潜っていく。

*

刻が経つ。窓から差し込む光が、昼夜の移り変わりを教えてくれる。

時間の感覚などとうに失せた。感覚が摩耗していく。心がすり減っていく。おれを構成するなにもかもが、失われていくような気がする。

どれほどの歳月が経過したのだろう。

一年だろうか、十年だろうか、五十年だろうか。

あるいは百年、二百年を超えたか。

はるかかな時の果て、重い鉄扉が、きしんだ音を立てて開かれる。

軽い足音がひとつ、近づいてくる。

おれはゆつくりとまぶたを持ち上げる。

牢の扉が、あつけなく開いた。歳月の経過で、封印の魔術は完全に効力を失っていたようだ。

火のついたろうそくを手に、ひとりの女が入ってくる。

「待たせたな」

女が、高慢に告げる。

ろうそくの炎に照らされたその姿は、十五かそこらの少女だった。威厳のある声で、片方の手を腰に当て、胸を張っている。

腰まである紅蓮の髪。紅玉のようなふたつの瞳が、おれを射貫く。興奮してか、白い頬を紅潮させている。

こんな場所にはあまりにも不釣り合いな、純白のドレスをまとうていた。まるで宮廷のパーティから抜け出てきたかのような様子である。

おれは、息を呑んだ。

ありし日の、あのかたにそっくりだったからだ。

「ユーフェリア」

思わず、そう呟いた……つもりが、声にならなかった。ただ、口をばくばくさせたただけだった。

少女は眉をつりあげて、怪訝な表情となる。かわいらしく、小首をかしげる。

「どうした、声も出ないか」

「あ、あ」



あまりにも長いことしゃべっていなかったからか、喉から出たのは喘ぎ声のようなものだけだった。

少女はおれの状態を理解したのだろう、にやりとしておれに近づいてくる。その優雅な所作のあちこちに、あのかたの面影があった。

いや、違う。

あのかたは、もっと儂げな雰囲気身をまとっていた。

彼女は、こんな風に自信ありげに笑わない。

彼女は、ユーフェリアではない。

当然だ、最後に声を聞いたときですら、彼女はたいそうな年齢だったはず。

あのかたは、とうに亡くなっている。

目の前の少女があのかたであるはずがない。

ありし日の想い人に似た少女が、手を伸ばす。無防備な仕草だった。なのに、異様なほどの圧力を覚える。

少女は、あぐらをかいて座るおれの肩にそっと触れた。

温かい。

ひと肌に触れて、おれはぶるりと震え……。

「おぬしに渡した霊気、いまこそ返してもらうぞ」

次の瞬間、おれは悲鳴をあげていた。全身が、業火に炙られるように、熱い。血液が煮えたぎったようだった。

長く長くなんの感覚もなかった身体に、それはあまりにも強すぎる刺激である。おれの様子に驚きもせず、少女は「すまぬな」とひとこと告げた。

渡した？ いったい彼女は、なにをいつている？

おれは混乱して身をよじった。

少女が弾き飛ばされ、牢の床に転がる。

「なにをする！」

少女がぱっと立ち上がり、おれを睨む。

「なにもクソもあるか！」

おれは、叫んだ。

声は、すっと出た。はたしてこれは、何年ぶりの自分の声なのだろうか、と頭の片隅で考える。

それより、いまは目の前のこいつだ。ユーフェリアの姿をして、いきなり現れて、おれを拷問しだした、こいつは……。

「いったい誰だ、おまえは！」

「わからぬか？」

少女が、きょとんとした顔になる。立ち上がり、ドレスの埃を払う。ふう、とおおきくため息をつく。

「本当に、わからぬか？」

顔をあげ、おれをみる。

紅玉の瞳に見据えられ、ひどい喉の渴きを覚えた。

飢え、渴き。もう、そんな感覚はとうに失せたと思っていたのに……。

少女は、みる者を湧けさせるような笑みをみせた。

「おぬしが、われを滅ぼした最後の一撃。あれはたいへんに甘美であつたぞ」

「滅ぼした……一撃？」

なぜだか、脳裏をよぎるものがある。この瞳を、おれは知っている。戦士としての直感が、そう告げている。

「邪竜アイシヤザック、生まれ変わり、五百年の時を経てこうして舞い戻った！ われを殺した勇者がひとり、剣聖コガネよ、いざ潔く、われから奪ったたちからを返すがよい！」少女は堂々と、そう告げた。

その全身から、覇氣のようなものが溢れている。どうしてか、信じられた。彼女の言葉が真実であると、肌の震えで、そう理解させられた。

「行くぞ、コガネ！ これよりわれは、汝を時と肉の呪縛より解放する！」

*

目の前に現れた少女が邪竜アイシヤザックと名乗ったことについて、おれはただ、ああ、とそのままに受け止めざるを得なかった。

やはりそうか、そうなのか、と。理屈もなにもかも飛び越えて、皮膚感覚のようなもので理解できてしまった。

その身は、華奢な人間の少女にすぎないのに。

まとう靈気は、ごくごくわずかにすぎないのに。唯一、紅蓮の炎のような瞳だけがその面影を残すにすぎないのに。

溢れ出る覇氣、とでもいおうか。

彼女はまぎれもなく、コガネと六人の仲間たちが死闘を演じ退治した、あの伝説の邪竜に違いないと、確信してしまう。

「問答をしている暇はない。そろそろ、警邏の者が気づくであろう。手短に告げるぞ」

少女はいう。その瞳をろうそくの炎で燃え上がらせ、口の端をつりあげる。
「おとなしくしておれ。われにちからを返すがよい。かわりに、汝をこの牢獄から解放
つてやろう」

「おれを……解放、する？」

「うむ。返事や、いかに。……いや、問答は無用。黙って、じっとしておればよい」

おれの返答を待ちもせず、少女はふたたび、おれの肩に手を触れた。おれの全身を、す
さまじい苦痛が襲う。

「ぐ……っ」

地獄の業火に焼かれるような、壮絶な痛みだ。それをおれは、うめき声ひとつで、耐え
た。微動だにせず、少女をみあげた。

少女は額から汗を垂らし、にい、と笑った。

彼女もまた、同様の苦痛を覚えているらしい。

それでも、声ひとつあげない。

おれは、負けるものかと、口の端をつりあげた。互いに、笑ってみせたのだ。

我慢比べは、ゆっくりと三つ数えるほどの時間で終わった。

邪竜と名乗った少女が、ゆっくりと肩から手を離す。おれはひどい虚脱感に、倒れ込み

そうになった。そんなおれの身体を、少女が慌てて支えた。

「まだ倒れてもらっては困るぞ」

おれの身体は、思った以上にちから強い少女の細腕に支えられる。

彼女は、活力に満ちていた。いや、とおれは少女の身体全体を……目を細めて、みつめ
る。

霊気の流れが、みえた。

おそろしいほどの霊気が、彼女の周囲を渦巻いていた。

さきほどまでは欠片も感じられなかったからだ。まるで別人のような、とてつもない
ちから……その源がなんなのか。

わかっていた。これは、おれの霊気だ。

どうやったのかはわからないが、彼女はおれから奪った霊気を、わがものとしている。

そのおおもとは、邪竜の血を浴びたことにより得たものだ。

邪竜の持っていた、ヒトの身にあつてはならぬ霊気。このおれを不老不死の化け物にし
てしまった霊気である。

と……騒々しい足音が響き、牢の外で立ち止まる。

男たちの、乱暴な誰何の声が響く。

少女が、ろうそくを手にしたまま振り返る。

牢の外に、兵士たちが立っていた。革鎧をまとい、剣を手にしている。ものごしをから判断して、なかなかの精兵のようだ。

「そこを動くな！ 小娘、その男は大罪人である、いまずぐそばを離れて……」

「われに命じるな」

少女が、無造作に片手を振る。霊気が刃となり、兵士たちを襲った。

兵士たちが吹き飛ばされ、廊下の壁に激しく叩きつけられる。悲鳴と苦悶、狼狽の音が響く。

部屋の外に居るのは、おそらく三人か、四人。これはどういうことか、と戸惑っているようだった。

「この程度、か。いまのわれのちからでは、小僧ひとり、くびり殺すことすらできぬな」その間に、少女はこちらへ向き直る。

あのかたを思わせるルビーの瞳で、おれを射すくめる。

「さて、コガネよ。助けて欲しいか」

改めて、そう訊ねてくる。

おれは即座にうなずいた。

「ああ、助けてくれ。おまえがなにもものでも構わない。おれの拘束を解いてくれ」

思案に意味はない。なぜ、と問う理由もない。

長く、待っていた。

ユーフェリアの言葉だけが、唯一の希望だった。

彼女の子孫が、いつかおれを救ってくれるかもしれない、と……。

現れた人物は、たしかにあのかたの面影を残していたものの、彼女本人ではなかった。

なぜか、アイシャザックと、邪竜の名を名乗っている。

助けてやる、と彼女はいった。

思っていた救いとは少し違うものの、迷っている暇がないのは明らかだ。

「ふんっ」

少女はおれを拘束する鎖を握ると、ひと息に引きちぎってみせた。

まるで紙でできているかのように、あっさりと。少なくとも百年以上に渡りおれを束縛していた枷が、じゃらん、と音を立てて床に落ちる。

それで、終わりだった。

おれの霊気を封じていたものは、消え去った。

次の瞬間。

おれの全身に、ちからが満ち溢れる。少女に奪われたはずの靈氣が、ふたたびこの身に戻ってきたかのようだ。

「ん？」

いや、そうではないのかと首をかしげる。

靈氣は、たしかにあったのだ。

最初から。この、おれのなかに、ずっと。

これは、邪竜から与えられた靈氣ではない。鎖によって封じられてきた、もともとのおれの靈氣だ。

何十年、いや何百年と続く瞑想によって練り上げられた、本来のおれのちから。それが、いま、解き放たれたのだ。

「おれの靈氣、前よりおおきくなってるのか」

「うむ、たいした靈氣の練り上げである」

少女が、生意気に胸をそらす。

「五百年、鍛錬を積んだがゆえか」

「は？ 五百年？」

少女の言葉に、思わずぼかんと口を開けてしまう。

「そうだ、五百年である。おぬしが幽閉されてから、五百年が経った」

「そうか」

おれは両の掌をみつめた。五百年もの間、身動きすらろくにできなかったおれは、ひたすらに瞑想していたのか。

「そう、なのか」

深く、深く潜っていた。

おそらくは、ヒトの誰よりも深く。ただ純粋さだけが残る場所に。

師匠は、あの仙者は、なんといっていたか。

そう、無我の世界、とか。

おれは、そこでひたすらに己を磨いてきた。靈氣を高め続けてきた。

それにしても……五百年、とは。

「きさまら！ ええい、殺して構わん、いくぞ！」

兵士のひとりが、叫ぶ。ふたりの兵士が、剣を手に、牢のなかへ入ってくる。

「ちよっと下がってろ」

「うむ」

少女が、一步、下がる。

おれが、一步、前に出る。

こちらは無手で、兵士たちの武器は、建物のなかでも振りまわせる小ぶりの剣だ。リィチでは不利だが、そんなもの関係ない。

先頭の兵士が振り上げる剣、その間合いの内側へ滑り込む。

驚く相手の、剣を握った手首をとり、クイとひねる。すぐ後ろで剣を振り上げた兵士の胸もとに、ひとりの兵士の剣が深々と突き刺さる。

ふたりの兵士は、かん高い悲鳴をあげた。

胸に剣が埋まった兵士はもちろん、その剣を手に使っていた兵士の腕もあらぬ方向にねじれている。

おれは、ふたりの頭を無造作に押し潰みにして、床に叩きつけた。

兵士たちの首の骨が折れる音と共に、カエルが潰れるような声が牢に響く。

「武の構えがなっていないな。隙だらけだぞ」

おれは改めて、立ち上がる。通路に残った男たちが怯えと共に後ずさる。

「ところで、逃げ道はあるのか」

「無策だ！」

少女はちから強く宣言する。

「おぬしからちからを返してもらえば、なんとでもなろうと考えてのこと」

「なんとかなるのか」

「返してもらったちからが、思ったよりはるかに少なかった！ 困る！」

自信満々に、困るとかいわないで欲しい。

「ここは監獄城の最上階だ。逃げ場はないぞ」

「で、あるな！ われも、ここまで来るのにたいそう苦労した！ 家宝の魔導具はすべて使いきったぞ！」

監獄城は、流れの激しい川の中州に建てられた難攻不落の要塞だ。

本来は魔物の大侵攻への対策として建てられたもので、帝国の拡張に伴い、本来の用途に適さなくなったため牢獄として再利用されることになった。

五百年以上前、その話を聞いたときは、よもやこのおれがそこに幽閉されることになるとは思ってもみなかったのだが……。

「なら、仕方がないな」

おれは通路を駆けてくる増援の兵士の足音を聞く。五人……いや、六人か。

「出口がないなら」

おれは扉とびらの少し横に掌を当てる。

「全員、ぶちのめそう」

おれの身にまとった膨大な靈氣が、渦うずを巻く。

靈氣を一点に集中させる。

腕の筋肉を膨張させ、すつと押し出す。

「衝崩撃」

数百年、練り上げた靈氣の、ごく一部を放出させる。

次の瞬間、本来ならば封印の結界によって傷ひとつつかないはずの牢の壁が、外側に弾けた。やはり、封印は歳月の経過で消えていたのだろう。

駆けてきた兵士たちを、悲鳴すらあげさせずに吹き飛ばす。一步、通路に出た。兵士たちは通路の端で瓦礫に埋もれ、倒れている。

おれは首を振って、少女をみる。

少女が、ろうそくを手を駆け寄ってくる。

「乱暴であるな」

「いまさら、きみがいうことか。このまま監獄城を制圧するぞ」

「あー、まあ、あまり無用に殺さぬようにな」

動かない兵士たちを見下ろし、少女は呆れた様子でいう。

「ここに詰めている兵たちは、王都での争いに関わることもできなかった、日陰者たちと聞く」

「王都？ 帝都じゃなくて？ それに、争い？」

「あとで説明する」

そうしてもらおう。階下から聞こえてくる足音に向かって歩を進めた。

＊

それからおれは数度、襲ってきた兵士たちと戦った。

いずれも容易く、ひねってみせる。

残りの兵士たちは、階下に逃げていった。

おれと赤毛の少女が城の一階まで降りると、広間には数十人の兵士が待ち構えていた。

おつ、一斉攻撃してくるのか？

と思いきや、ひととき大柄な男が、ひとりで進み出てくる。

「まさか、開かずの最上階に、本当にヒトが住んでいたとは。驚いたぞ」

その男が、いった。
 革鎧を着て、巨大なハンマーを肩にかついでいる。ひとめみてわかるほど、これまでの兵士とは格が違った。

こいつが隊長か。後ろの兵士たちの表情に余裕が戻っている。彼の強さに対して信頼を抱いているのだろう。

「ささま、ほんとうにヒトなのか？」

その隊長とおぼしき男が、いささか驚いた表情で尋ねてくる。おれは、にやりとしてみせた。

「さてね。おれはヒトのつもりだが」

「まあいい。魔物であっても、この大槌で潰せば死ぬだろう。わが剛力の魔剣技の前には竜として首を垂れると知れ」

男は表情を引き締め、ハンマーを構える。

うん？ 魔剣技？

男が床を蹴り、突進してくる。

「まあ、いいか」

巨大なハンマーが、おれの頭めがけて振り下ろされる。予想よりだいぶ素早い動きで、

しかも相手のハンマーからは妙な感覚を覚えるが……。

おれはその瞬間、全身に靈氣をまとい、ひときわちからを込めて飛び出す。

「衝崩撃」

ハンマーの間合いの内側に飛び込み、男の腹に向かって、さきほど壁を破碎した一撃を叩き込む。

男はハンマーを最後まで振り下ろすこともできず、反対側に吹き飛ばされた。

広間に並ぶ柱に叩きつけられ、その柱が微塵に粉碎されてさらに次の柱にぶつかって……そこでようやく、止まる。

口から盛大に血を吐いて、絶命していた。

「ひ、ひいつ、化け物だ！」

「逃げる、あのかたで敵わなかったんだ、おれたちなんか戦えるはずない！」

兵士たちが、悲鳴をあげて逃げ惑う。

「やりすぎだ、ばかもの」

「すまん、靈気の調整が難しいんだ」

魔剣技、つてやつで受け流すかとも警戒したんだけど、そんなこともなかった。ほかの兵士は怯えて遠くからこちらをみているだけだ。

ここは川の中州につくられた難攻不落の要塞、逃げ場はない。深夜。どうか命だけは、と平伏する数十名の兵士たちを前に、おれは赤毛の少女と顔を見あわせる。

「コガネ、おぬし部下が欲しいか？」

「いらん」

「城が欲しいか？」

「ますますいらん」

ならば、と少女は兵たちを前に告げる。

「服と旅の装備、剣と兵糧を用意せよ。われらにさっさと出ていって欲しければ、なるべく上等なものを。さあ、素早く！」

兵士たちは、押し殺した悲鳴をあげ、慌てて少女の言葉に従う。命じたものは、あつという間に用意された。

*

かくして邪竜を討伐した勇者のひとり、このおれ、剣聖コガネは。長い長い虜囚のすえ、野に解放されたのである。

第二話 五百年後の世界

森のなか、小高い丘の上。

おれと少女は、並んで朝日を見上げていた。太陽の輝きがこれほど美しいとは、思ってもみなかったことだ。

「前世の記憶、というものをおぬしは信じるか」

遠くの山をみつめながら、少女がいう。その長い赤髪は、陽光を浴びて炎のように揺らめいている。

「そういうおとぎ話は知っているし、救世主の生まれ変わりがどうのつて説法くらいは聞いたことがあるが」

「つい先日のことである。われの身に、生まれる前の記憶が蘇った。子守唄として聞かされた英雄譚の敵役、邪竜アイシャザックとして、おぬしに首を刎ねられた記憶だ」

「それこそ、おとぎ話じゃないか」

アイシャザックと名乗った少女が、ふんと鼻で笑う。ちらり、とルビーの瞳でおれをみ

た。

「コガネ、おぬしとの戦い、その行動は、視線の動きひとつひとつまで思い出せるぞ」
それから彼女が語った、邪竜と七人の勇者の戦い。そのときのおれの動きは、信じられないことに、おれの記憶そのままだった。

それどころか、彼女はおれが知らないおれの細かい癖まで、いいあててみせた。

フェイクを入れる寸前に左肩を引くことなど、これまで誰ひとり指摘しなかったことがある。

「そうか」

おれはため息をつく。

「邪竜の炎の壁で追い詰められた原因は、おまえがおれの下がるタイミングを見切っていたからなのか」

「信じたな、コガネよ」

「信じるしかないだろう。もしいまの世におれたちの英雄譚が伝わっていたとしても、そんな些細なところまで吟遊詩人が描写するとは思えない」

「だいいち、とおれは少女の燃えるような瞳をみつめる。その瞳の奥にある、真実の彼女を捉えようとする。」

「その目の輝きは、おれが戦ったあの邪竜と同じだ」

「ふむ、そうか？ それは鏡をみてもわからなんだ」

少女は腕組みして小首をかしげた。

「ま、よからう。そういうわけで、記憶が蘇ったわれは、次にちからを求めた。かつておぬしちに奪われたたちからは、記憶を取り戻しても戻ってこなかったがゆえ。ただ、取り戻す方法はわかっていた。奪われたのなら、また奪い返せばよい。幸いにして、おぬしがあの監獄城の最上階で囚われたままであると、われは聞き知っていた。遠い祖先よりの言伝ゆえ、な」

言伝。

そのひとことで、おれは彼女の祖先が誰なのか、理解する。

「ユーフェリアさま」

知らず、頬を涙が伝い落ちていた。

「なあ。五百年経っているって、本当なのか」

「うむ。真実、おぬしらとわれとの戦いから、五百年が経過しておる」
百年以上とは、思っていた。二百年という数字すら、覚悟していた。

まさか五百年とは……。

おれは己の両手を、じっとみつめる。
身体に満ちた、溢れ出さんばかりの靈氣を感じとる。

いまのおれは、かつてと比べて、どれだけ強くなったのだろう。
「長き勤め、ごころうだった」

「勤め、ねえ」

少女はおれをみあげ、「結果がすべてである。どれほどの歳月が経とうと、われとおぬしが出会った。それがすべてで、ゆえにすべてよしである」といって、呵呵と笑う。

なんなんだ、こいつは……。

あの邪竜アイシャザックは、こんな性格だったのか。

いや、彼女はさっき「記憶が戻った」といつていた。

この少女のもとの性格と邪竜の記憶が重なり、目の前の人物になったということだろうか。

おれはいちど顔をそむけ、腕で涙を拭くと、改めて少女に向き直る。

「記憶が戻る前のきみは、どんなだったんだ」

「ただの、貴族の小娘であつたよ。この王国で、古の栄華にすがる、つまらぬ家に生まれた小娘である。先祖の言伝すら守れぬほど落ちぶれておつた家の、な」

「やつぱり、ユーフェリアさまの子孫なのか」

彼女の容貌をみれば、ひとめでわかることだった。

おれの許嫁であつた皇女、ユーフェリアの若きころ。

その生き写しともいふべき容姿であるのだから。

「きみは、さ」

「アイシャ、と呼ぶことを許す。親しみを込めて発言せよ」

「あー、じゃあ、アイシャ。きみの家族は、いまごろ困ってるんじゃないか」

アイシャと呼ばれた少女は、腕組みしたまま、ふむと鼻を鳴らした。

胸をそらし、青空をみあげる。かつて翼をもち自由に飛んだ空に、彼女はなにをみたのか。おれに視線を戻したときには、その紅の瞳に強い意志が宿っていた。

「家族は、もうおらぬ。皆、消えた」

「消えた？」

「ちようど、われの記憶が戻った日のことだ。この国で、政変があつてな。父も母も祖父も……兄も、妹も。使用人に至るまで、暴徒となった民に殺された」

家族全員が殺された。

そんな壮絶な体験を、少女は淡々と語る。

「われはたまたま、変装して街に繰り出していたゆえ助かったのだ。もつとも、そのことを知った衝撃でこの記憶が蘇ったのだから、なにが幸いするかわからぬもの」

少女は森をみおろす。

その森の彼方に、街があるという。

かつての帝都、いまは群雄割拠するこの大陸においては無視できるほどの小勢力にすぎない王国の都が。

「あれはな。ザザ、という名のちっぽけな国である。いや、そうであった。王が亡くなる前に、後継者を指名しなかった。ただそれだけのことで、貴族が、民が、互いに殺し合うことになってしまった、いまは亡き国である」

「国がなくなった、のか」

「この数日だな」

さきほどアイシャが少し語っていたが、監獄城にいた兵士たちは、その政変の蚊帳の外に置かれていた。

城の下層と見張り塔のみが使用されていたという。

上層は、長く「凶暴な大罪人が囚われている」とのみいつたえられ、誰も立ち入ることがなかったのだと。

そもそもザザと呼ばれた王国は、ただかつての帝都を領土としている以外、帝国とはなんの繋がりもないらしい。

監獄城の兵士たちには、少し悪いことをしたか。

あの帝国も、おれが想いを寄せた彼女も、もうとっくに存在しない。

「さて、コガネよ。おぬしはこれから、どうしたい」

「どう、って」

「おぬしはもう、自由だ。生きるも死ぬもな」

五百年、食事ひとつせずとも生き永らえた不老不死の身体だ。そのはずだった。なのに彼女は、いまなんといった……？

「おれが、死ぬる？」

「すでにおぬしの不死性は消えている。われが、奪った。許せ。それはヒトの身には過ぎたるちからだ」

「あ、ああ。それで、いい。うん、それは……嬉しいことだな」

唐突すぎる話に、おれは困惑した。

五百年、おれが囚われていたものは、本当はあの牢獄などではない。

おれは、邪竜の血を浴びて得た不老不死のちからそのものの虜囚であったのだから。

「そうか。おれは、死ぬるのか」
「うむ」

「素晴らしいな」
その眩^{くら}きは、皮肉でもなんでもなかった。五百年という歳月は、ヒトの身には長すぎたのだ。

帝国はとうに消え、かつて帝都があった地も騒乱^{そうらん}の最中^{なか}にあるという。

この身体から、不死性はなくなった。

もう、生きることも死ぬことも自由だ。

どこへ旅をしてもいい、誰に仕えてもいい。どうせ、この時代に、すでにおれを知るものは、目の前の少女だけ……。

「は、はは、ははは」

おれは天を仰^{あお}ぎ、思わず笑い出していた。アイシャが、おれを奇妙^{きみぢう}なものをみる目で眺^{なが}める。構わず、おれは笑い続ける。

「……いや」

ふと、われに返った。

五百年を経てもなお、ほかに知己^{ちぎ}がいる可能性に思い至ったのだ。

仲間たち。五百年前の仲間たちは、いったいどうなったのかと。

おれは傍^{かたわ}らの少女をみる。

「あいつらは？ 邪竜アイシャザックを倒^{たお}しその血を浴びた、ほかのみんなは、どうなった」

「全員の行方を知っているわけではない。無論、いずれは残りの六人からも、われのちかちを取り戻すつもりだがな」

「ってことは、みんな無事なのか」

あいつらのことを、思い返す。

これだけの歳月が経過しても、おれはひとりひとりの顔を鮮明^{せんめい}に思い出すことができた。心配だった。

おれが、あんな目にあつたのだ。ほかの者たちは、はたしてどうなったのか。いま、どうしているのか。

それを知りたくてたまらないのだが……。

アイシャは、首を横に振^ふった。

「わからぬ。そもそも記憶^{きおく}が蘇^{よみがえ}るまでのわれは、あまりにも矮小^{わいしょう}な存在であつた。この大陸が、いまどうなっているのかもよく知らぬのだ。五百年という時は、あまりにも長すぎ

た。おぬしらの存在が伝説として語り継がれ、おとぎ話のなかに封じられるほどに」

「それは、そうか」

「そんなわれであっても、シルダリの聖女の噂は耳にしたぞ」

どくん、と心臓が高鳴る音がした。

聖女。

コガネはそのふたつ名で呼ばれる人物に、ひとつだけ心当たりがあった。

「ミルか！」

「うむ。おぬしらのなかでもっともまぶしい、光の靈気の持ち主であつたな。われがなんど炎の息を吐いても、それを受け止め続けた。いかなる魔物もひれ伏すわれの眼を正面からみつめ返し、笑いかけてすらみせたその豪胆、よく覚えておる」

「そう、か。ミルは、まだシルダリにいるのか」

聞けば、かつてのシルダリ辺境伯領は、いまシルダリ教国として繁栄を謳歌しているとのこと。

聖女ミルは、シルダリ教国の旗印としていまも現役、かの国の精神的な支柱として活躍しているらしい。

もつともそれらは、旅の商人や吟遊詩人の噂話として入ってくる、なかば与太話のよう

なもので……どこまで信頼がおけるかは、アイシャにも見当がつかないという。

「ミルに会わなきゃ。おれはシルダリに行く」

「ならば、目的地はわれと同じであるな」

そうか、とおれは気づく。

おれから邪竜のちからを取り戻したアイシャは、残るおれの仲間たちからも邪竜のちからを回収したいのだ。

「アイシャ、きみにひとつ聞きたい」

おれは、傲慢そのものの態度で胸を張っている少女をみおろす。少女は、ふん、と顎をつきだしてみせた。

「なんであるか」

「きみは、ちからを取り戻したあと、また人類の敵になるのか」

五百年前の邪竜戦役。

つまり、目の前の少女の前世が大暴れた災厄において、彼女は数多くの魔物を従え、全人類の敵として立ちふさがった。

かの戦役のはじまりにおいて、アイシャザックは三つの国を滅ぼし、そこに住む人々をことごとく殺戮してのけた。

人類は恐怖し、ひとつになった。

当時、最強を誇った帝国のもとに次々と下り、過去のしがらみを捨て、一丸となつて戦った。

それから、幾多の苦難を乗り越える物語があつたのだが……。

最終的に、人類は七人の精鋭をアイシャザックの喉もとに送り込み、これを討伐してのける。

それが、おれたちだ。

大陸最強の七人。

邪竜殺しの勇者たち。

おれはそのなかでも、最強の剣聖と謳われていた。

「わからぬ！」

はたして邪竜の生まれ変わりを名乗る少女は、胸を張って勢いよく、そう返事をした。

「なにせ、あのときなぜ、われがおぬしら人類と戦つたのか、いまひとつよくわかつておらぬのだ」

「おいおい、それっていったい」

「記憶が、欠落しておる」

アイシャは唇を尖らせ、おれを睨んだ。

「もとより竜として生きた数千年の蓄積は、ヒトの器に収まりきらぬものかもしれぬが……。それにしても、覚えておらぬことが多すぎるのだ。先刻、おぬしからちからを取り戻した折、同時にいくらかの記憶も戻った。しかし、なぜ五百年前、われがおぬしたちと戦つたのか、その経緯についてはさっぱりである」

「不安になる話だな。記憶が戻ったら、きみはヒトの敵にまわるかもしれないってことだろう」

「と申しても、いまのわれはヒトである。ヒトが竜の理に従い行動するべきだとは、思わぬよ」

さばさばした表情だった。おれは首をかしげる。

「ヒトが、竜が、つてなにかが変わるものなのか」

「異なことを。おぬしは五百年前、ヒトの代表としてわれに立ち向かつたのであろう？」

「それはおまえが、魔物を引きつれて攻めてきたから……ああ、そういうことか」

かつてのアイシャザックが魔物たちの守護者であつたように、かつてのおれたちはヒトの守護者であつた。

いまのアイシャは、ヒトのなかで生きて、己をヒトだと認識している。

ゆえに記憶が戻ったとしても、ふたたび魔物の側に立つことはないだろう、と……そう、いつているのだ。

「その記憶が戻っておらぬ以上、必ずこうである、と断言するのは誠実といえぬ。ゆえにこれは、いまのわれができる精一杯の返答と心得てもらいたい」

「なんつか、生真面目なんだな」

「おぬしに対して嘘をつきたくない」

アイシヤは、おれをまつすぐみつめた。

信じていい、とおれは直感する。

少なくとも、彼女はあとでだまし討ちをするような人物ではないと。

「おぬしの仲間、かつての七人の勇者たち、その残り六人から取り戻すのが、ひとまずわれの目的となる」

「彼女がきみにおとなしくちからを返すとは限らないぞ」

「そうであらうか？」

「おれと違って、あいつは責任感が強いからな。それが人々のためになるなら、きみから取り込んだ靈気をよりよく活用できると考えるなら……そのときは、どうする」

アイシヤは、むむ、と腕組みして考え込む。



「どうやらそんなことは、これっぽっちも想定していなかったようだ。」

「それは、ありえぬと思うのだが……」

「そうなのか？」

「まあ、よい。そのときは、そのとき考えればよからう。なに、悪いようにはせぬ。われを信じよ」

と、いわれてもなあ。おれは後ろ頭を掻いた。

「きみが無闇に暴れないというなら、それでいいか」

「うむ。いまのわれのちからは全盛期にほど遠い。しかと、われを守るがよいぞ」

*

朝日を浴びて、森のなかを少し歩いたところで、おれの腹が鳴った。

思わず、笑い出してしまふ。

「おぬし、なぜ笑う。空腹のなにか、そんなにおかしいのか」

「おかしいさ。おれはこの五百年、いちども、なにも口にしていなかったんだぞ」

喉が渴いたことも、お腹が空いたことすらなかった。

アイシヤザックの血をこの身に浴びてから、ずっとだ。

帝国軍に囚われ、過酷な取り調べを受けていたころ、そんなおれをみて、もはやこれはヒトではないのだと罵る声も聞いた。

「竜は、大気の靈氣を吸収することで生きる。おぬしもそういう存在となっていたのであろう。ヒトではない、というのは事実その通りであったのだ」

「きみが、そんなおれをもとのヒトに戻してくれたわけだ。ありがとうな」

「われにとっては、ただ貸したものを返してもらっただけのこと。礼をいわれる筋合いはない」

アイシヤは、どこまでも傲岸不遜な態度であつた。白いドレスは少し薄汚れているが、その精神には一点の曇りもないと。

朝日を浴びて、燃えるように赤い髪が輝く。

紅蓮の瞳は、まっすぐに前をみつめている。

その様子に、おれはどうしても、ありし日のあのかたを重ねてしまふ。心に、鈍い痛みを感じる。思わず、視線をそらしてしまふ。

彼女に悟られないよう、ちいさくため息をつく。

「飯は、監獄城の親切なやつらが用意してくれたわけだが、さて」

おれは気を取りなおし、耳を澄ます。

獣^{けもの}の気配を探るが……ふむ、せせらぎが聞こえる。

「川が、あっちにあるな。せっかくだ、川べりまで行つて、食べるか」

おれは進行方向から少しずれた茂み^{しげ}の向こうを指さした。

ちなみに現在、おれたちふたりは近くの村に向かっている。アイシャの知己^{ちぎ}が住んでいるとのことである。

この場合の知己、とはアイシャが記憶を取り戻す前、貴族の令嬢^{れいじょう}であったころの交友関係^{けんがく}だ。

もとは彼女^{かのじよ}の屋敷^{やしき}の侍女^{じじよ}で、その村の人間と結婚^{けつこん}して屋敷を離れたのだとか。親しい間柄^{あいだ}であつたらしい。

「保存食だけじゃ味気ない。せっかくだ、魚をとろう。きみも腹が減つてないか」

「そこそこ、であるな。おぬしから靈氣を返してもらつたとはいえ、この身はまだ、竜よりずっとヒトに近いようだ。われもまた食事を所望^{しょうぼう}するぞ」

「きみがヒトじゃなくなるには、ぜんぜん足りない、つてことか？ おれにとっては充分^{じゅうぶん}でも」

彼女にも、そのあたりはよくわかつていないらしい。

だが現に、アイシャという少女は多少の空腹を覚えている、歩き疲^{つか}れてもいる、と少し

恥^はずかしそうに告白してきた。

「靈氣をとりこみ、もう少しは頑健^{がんけん}になるかと思つたが、いささか期待外れであるな」

「おれの歩くベースについてこられるだけでも、たいしたものじゃないか。なんの訓練も積んでいなかったんだらう？」

行軍訓練を受けた兵士ですらも音をあげるほどのペースで歩いていたつもりだ。彼女が平気な顔でついてくるから、そういうものかと気にもしていなかった。

「魔術^{まじゆつ}のほうも、思つたよりずっと制御^{せいぎよ}が難しい。さきほどから魔術を試しているのだが、実戦では風の第三階梯^{かいてい}がせいぜいであろう。ほかの属性は、子どもの遊戯^{ゆうぎ}程度であるな」

「へえ、魔術を使えるんだな。そりゃ頼^{たの}もしい」

おれは詳しくないが、ひとくちに魔術といっても、扱^{あつか}う精靈^{せいれい}の属性によつて区分がある。ヒトが行使できる精靈の属性は、五つ。

火、水、土、風、そして光だ。

ちなみにおれは、魔術がいつさい使えない。

風の第三階梯^{かいてい}といえは、五百年前の帝国軍の魔術師部隊では精鋭の部類だろう。

それでも充分にすごいこと、と思うのは……しよせん、ヒトの身で測つてしまふからだろう。

「おぬしの仲間、はるかに優れた風の魔術を行使しておったであろうに」

「ネハンのことか。あいつは、本物の天才だったからな」

かつての仲間を思い出す。いま彼は、無事でいるのだろうか。

「ま、ないものねだりをしてしても仕方があるまい。ほかのやつらからも靈氣を取り戻せば、もっと高位の魔術もコントロールできるようになろう。それまでは、そなたに苦勞をかける」

「構わないさ。ミルがそれを望むなら、な」

ところで、とこの機会におれは訊ねる。

「城で隊長っぽいやつが使っていた魔剣技、ってあれはなんだ？ 五百年前はみなかった技術なんだが」

「われは剣術などわからぬ。おぬしが知らぬというのなら、この五百年で發達したものであろう」

アイシヤはぶつきらばうに告げる。

やつぱり、そうなるか。この時代のなにが昔と同じで、なにが昔と違うのか、もつとよく調べる必要があるな……。

せせらぎに導かれ、おれたちは小川にたどり着く。いちばん深いところで、膝まで浸か

るほどの川だった。

魚をとるのは、簡単だった。

川の中央に立ち、掌を水に浸けて、靈氣を一気に送り込む。

水が、柱のようにぶわっと立ちのぼった。

巻き込まれた何匹もの魚が、陸に打ちあがる。草の上で、腹をばたばたさせていた。

「雅の欠片もない魚釣りよな」

「腹が減ってるんだ。悠長に釣りなんてやってられるか」

火を起こすのは、アイシヤの魔術に頼った。

着火の魔術は、どんな属性を使う魔術師にとっても初歩も初歩で、アイシヤいわく「子どもの遊戯」である。魔術の苦手なおれにとつては、これ以上なく便利な技術に思えてならないのだが。

精靈に語りかけるためには、生来の才能が必要なのだ。

おれにはそれが、致命的に欠けていた。この身にあるのは、練り上げた靈氣と鍛えられた武術の腕だけである。

少女の掌から生まれた炎が、乾いた木の枝を燃焼させる。

焚き火は、遠くから目立たぬよう、木々の傘の下で行った。背囊からとりだした小鍋で

水を沸騰させ、保存食の干し肉を投入する。

ついでに、魚を木の枝に刺して焼く。

ほどよく魚が焼けたあとで、かぶりつく。

「まずい」

それが、五百年ぶりの食事の、正直な感想だった。

痩せた川魚は、砂っぽくて、骨ばかりで、味もなにもあったものじゃない。同じく魚にかぶりついたアイシヤも、顔をしかめていた。

水で茹でた肉をかじる。

固くてばそぼそしているが、強い塩味のおかげで口直しにはなる。

「うむ、もう少しマシな料理ができればよかったのであるが」

「仕方がない。すべて揃った旅なんて贅沢、片手で教えるくらいしかしたことがないさ」

「記憶が戻る前のわれは、いちおうは貴族の娘であつたゆえ、舌が肥えた」

アイシヤは、そこそこ身綺麗にし、そこそこの教養を身につけ、そこそこの食事をしていたという。

そんな平和な家庭も、クーデターにより、一夜にして崩壊した。

生き残ったのは、彼女ひとりであつた。

「そう、か」

そう呟いたおれになにを感じたのか……。

アイシヤは、「気にするでない」と笑いかける。

「すでに終わったことよ。無論、アイシヤザックとしての記憶が戻るまでの人生が無益だったわけではないが、失われたものに拘泥して前を向けぬようでは時の精霊に笑われようあやつらは、未来をこそ尊ぶのだから」

「よくわからんが、それがきみの矜持なら、まあ承知した」

おれたちは、粗末な食事を強引に腹に収めたあと、焚き火の跡を消して出発する。

*

時折、休息を挟みつつも夕方までなにごともなく森の獣道を歩き続けた。

おれは旅に慣れていたし、アイシヤは竜としての記憶がゆえか、その肉体が頑健になつたおかげか、過酷な行軍にも文句ひとついわない。

正午を過ぎ、日が傾き始めたころ、おれは歩みを止める。

すぐ後ろを歩いていたアイシヤは、おれの背中に鼻をぶつけて「ぎゃん」と悲鳴をあげた。

「痛いぞ、コガネ。急に止まるな」

「囲まれている。樹上だ」

「ふむ」

おれがそういつても、アイシヤが頭上を振り仰いだ気配はしない。

相手と目を合わせれば、その瞬間から戦闘が始まると理解しているからだ。このあたりは、前世の経験があるがゆえの思慮だろう。

「われが探ろう」

「魔術か」

「風の魔術の、初歩である。《囁き導きの声》」

少女が魔術を行使した。第一階梯を半短縮詠唱している。淡く暖かい風が、うなじを撫でた。

五百年前は、魔術に長けた者たちと共に行動していたからこそ、彼女がいまなにをしているのかすぐに理解できた。風の魔術で周囲の空間を探ったのだ。

「ウォーモモンガが、前の樹に二体、後ろに三体、右と左に二体ずつ」

「ムササビの魔物、だったか」

「今世で手に入れた知識によると、猿ほどの体軀で宙を滑空し、集団で狩りをするらしい。

森の凶暴な捕食者である。辺境の村を管理する場合、ウォーモモンガの群れの討伐は最優先事項であると。狩人殺し、という異名もある」

森の行軍において、樹上から集団で襲われることの恐ろしさは骨身に沁みて理解している。

訓練された軍隊であっても、身動きのとりにくい場所で奇襲を受けては甚大な被害を出してしまう。単独やペアで行動することが多い狩人ならば、なおさらだろう。

「われの魔術の腕を確かめるか？」

「いや、自衛だけでいい。おれも、いまの自分のちからを確認したい」

「了解した。われが足手まといにならねばよいがな」

一步、無造作に前進する。

それを合図としてか、かん高い声をあげて、周囲の木々から一斉に黒い影が飛び出した。

これがただの狩人に対する奇襲であれば、ひとたまりもなかったことだろう。

だが、ここにいたのは、おれだった。かつて邪竜を退治した勇者のひとり、当代最強の剣聖と謳われたコガネであった。

あいにくと、いまは満足な得物もない。

おれの手にあるのは、兵士たちから奪った、量産品で手入れの悪いなまぐらの剣がひと振りだけ。

だが仮にも武神の最後の弟子にとつては、一本の剣でも最強の武器たりえる。前脚と後ろ脚をいっばいに広げ、その間に張られた皮膜で風を受けて滑空する巨大なリスに似た魔物。

それが、頭上から迫る。

鋭く伸びた爪と凶暴に開かれた口から覗く牙が、おれを狙いすましている。

おれは、剣に軽く霊気を込めた。

硬化功、と呼ばれる霊気の使いかたである。

おれの顔面めがけてすつ飛んでくるウォーモモンガに対して、剣を正眼に打ち下ろす。真つ二つに両断してみせた。

ウォーモモンガから噴き出た青い血が周囲に舞い散る。そう、魔物の血は青い。やつらはヒトのようにまっとうな生物ではない。

返す刀で、時間差で飛んできた一体を、下からすくい上げるように剣の腹で叩く。ぎゃつ、と悲鳴をあげて、そのウォーモモンガは斜めに弾き飛ばされ、その身体が右手から来た一体に衝突する。

これで、合わせて三体。

左手から襲ってきたウォーモモンガの体当たりを、おれは身を沈めて回避する。低い姿勢で、右手からの残る一体に、横殴りの一撃。首を刎ね飛ばす。

おれはそのまま、身をひねって後ろをみる。

『《猛き疾風、荒ぶる旋風、集い集い満ち満ち、生まれよ出でよ渦巻く刃》』

背後から襲ってきた三体のウォーモモンガが、突如として生じた竜巻に身を引き裂かれ、断末魔の声をあげる場面がそこに展開されていた。

アイシャの魔術、風の第三階梯ストーム・ウォールだろう。かつての邪竜は、これよりはるかに巨大な竜巻を無詠唱で生み出していたものだが……これが、いまの彼女の限界か。『お互い、なかなかのものであるな』

「きみが足手まといになる気なんてさらさなくて、安心したよ」

「情けないことに、いまのわれは、どれほどのちからがあるのか己でも理解しておらぬのだ」

そんな会話をしながら、残るウォーモモンガを確実に仕留めていく。

ほどなくして、九体の魔物が地面に叩きつけられ、そのすべてが絶命した。

おれにもアイシャにも、かすり傷ひとつない。

*

森のなかで襲いかかってきた魔物をすべて退治したあと。アイシャは、さて、とナイフをとりだし、おれに手渡してきた。

「心臓の魔石を回収せよ。われがやってもいいが、おぬしのほうが得意であろう?」

「ま、そりゃな」

おれはウォーモモンガの胴をナイフでえぐった。青い血をかきわけ、赤黒い石をとりだす。

赤子の拳くらいのサイズで、すべすべした球形の石だ。これが、魔石である。魔物の命の源にして、靈気の塊だ。

魔物とは、心臓に魔石と呼ばれるこの結晶を持つ生物のことである。靈気の凝縮によって生まれ、他者の靈気を奪うことで成長していく。

おれたちを襲ったのも、ヒトの持つ靈気がまるで桃のようにかぐわしい匂いを放つからであるらしい。

そのあたり、学問的なことにおれは詳しくない。

おれはただ、魔物を狩ることで生きてきただけの、暴力が得意なヒトのひとりにすぎなかった。

その暴力装置の行きついた果てが、邪竜の討伐であったわけだが……。

「ちなみに、ウォーモモンガの爪や皮膜はそこその値段で売れるらしいが」

「面倒だし、いいだろ別に」

「いまのわれらは、無一文である」

金、か。

監獄城の兵士たちから、金も巻き上げるべきだったか……。おれは少し考えたすえ、首を横に振った。

「ただ金を稼ぐだけなら、そう難しくはないだろう」

「そう、であるな。われらの持つちからは、少なくとも村の自警団程度では相手にもならぬほどのものだ」

「みたいだな。いまの水準ってのが、おれにはまだよくわからないが」

魔剣技といい、五百年という歳月で武術や魔術はどう変化したのだろう。

「現代において、魔術はともかく、武術については五百年前とは比較にならぬほど弱体となっておると聞いた」

「は？ どういうことだ」

「帝國ていこくの時代、五林ごりん、と呼ばれる武術があつたそうであるな。それらはことごとく、失伝したと聞く。戦乱はかくも知識を破壊はかいすると、歴史の授業で習った」

五林とは、帝國で盛んだった武術の流派、そのなかでも特に人気だった五つのことだ。かくいうおれも、そのうちの五林ふりん、風林ふうりんの皆伝かいでんである。

靈氣をまといその身を強化する、纏まと。

それは、この五林において共通の技術だったはずだ。

そういえば、あの兵士たちも、魔劍技とかいうのを使っていた隊長も、纏すら使っていなかったな。

そうか、纏の知識すら失伝していたのか。

かわりに、魔劍技とかいうのが台頭したのか？

「で、あるがゆえ、人類の領域は魔物に激しく侵食しんよくされておる。にもかかわらず、人類同士で争っているのだから……救いがないとは、このことよな。無論、對抗策たいこうさくを持つ国も多々あるのだが」

「なるほどなあ」

大陸じようりやうの状況は、どうやら思った以上に混沌こんとんとしているようだ。

*

夕刻まで歩き続けた。

たまにアイシャが、風の魔術で木々の上まで舞い上がり、方角を確認する。

いまの彼女では、ふたりまとめて空中を高速で移動するというのは「少しばかり骨が折れる」とのことであつた。

魔術には、ただ靈氣があればいいというものではない。

精靈せいれいに呼びかけて靈氣を繊細せんさいに行使する能力、それを維持いじする能力も重要で、いまの彼女にはそれが決定的に欠けているのだという。

「喻たとえるなら、旅琴りよきんを弾く楽師が、病で指先の微細な感覚を、美麗な音程を維持し続ける声の張りを失ってしまったようなものだ。リハビリを続けられ、いずれもとに戻るかもしれない。しかしいまは、雑な音を奏で、雑な歌を唄うことしかできぬ。物語の面白さだけで、なんとか聴衆ちようしゆを集めているだけなのだ」

赤毛の少女は、寂しげに笑う。

それでは風の精靈たちも満足してはくれぬのだと。実際のところ、現在の彼女は精靈という超自然の存在を感知することすら困難らしい。

失ったものを想い憂う横顔は、ありし日のあのかたを思わせた。胸が、きゅっと痛む。
 「竜の身ならぬ己には、もはや叶わぬ夢よな。竜であったころは、世界に無数の友がいた。大地そのものと会話することすらできた。いまは、木々とも空ともこの土とも、話のひとすらできぬ。その記憶すら、断片しかないのだ」

それは、おれには想像もできない世界の話であった。竜であったころの彼女のありかたとは、なんと壮大であるのだろう。

もつとも、その壮大に世界と対話していた竜は、ほかならぬこのおれたちが退治したのだけれど。

「誰も恨んではおらぬよ。それもまた理のひとつ。われはヒトに挑み、そして敗れ去ったのだ。次の生においてそのヒトに生まれ、なぜか竜としての記憶が蘇ってしまうとは、しかも因縁浅からぬヒトとこうして旅をしようとは、なんと奇妙なことと思わぬでもないが」
 「おれだって、そりや奇妙な気分さ。あの邪竜が、こうしてかわいらしい女の子になっちまっているんだから」

「ふむ。口説くのであれば夜にしてみたいものだな」

アイシヤは、呵々と笑う。

冗談なのだろう。

こいつめ、あのかたと同じ顔になったかと思えば、絶対にあのかたがしないだろう、豪快な顔をみせやがる。

と、おれは後ろを歩く彼女に振り向き、仕草で静かにするよう促した。アイシヤは笑顔をひっこめ、真面目な顔になる。

おれは耳を澄ます。声が、聞こえてきたような気がしたのだ。

ヒトの悲鳴……それも、女性の声が風に乘って届いたような……。

「あつちだ」

おれは、進行方向のやや右手を指さした。走りだす。アイシヤがすぐ後を追って来るのが、足音でわかった。

全身に靈気をまとい、加速する。

風林の皆伝、纏速だ。

全盛期のおれよりも速いな、と考える。

少女に竜の靈気を奪われたとはいえ、五百年間、練りに練りあげたおれの靈気は、かつてのおれをはるかな高みに引き上げていた。

もつともそれは、ただ靈気の量だけの話だ。武芸の衰えはいないだろうし、かつて使っていた武器も防具も魔導具も失ってしまった。

総合的にみて、戦闘力は五百年前の半程度だろうか。

それでも、かつては邪竜にも届いた高みの半分。たいていの魔物を相手にするには不足とならないはずだが……。

「《吹き抜けよ疾風》」

だがアイシャは、全力で走るおれをあつという間に追い抜いた。少女の背中が、淡く虹色に輝いている。

ウィンド・ステップ、風の第一階梯の魔術の半短縮詠唱だ。

「急ぐのであらう」

アイシャが手を差し出す。

おれは、そのたおやかな手をとった。

ちいさな手にちからが入る。

「《吹き抜けよ疾風》」

ふたたび、少女が魔術を行使する。

暴風が強烈に背を押してきて、おれは、思わず「うお」と声をあげた。転ばないよう足にちからを入れ、地面を蹴る。

猛烈に加速する。

少女に並ぶ。

ふたたび、女性の悲鳴が届いた。こんどはアイシャにも聞こえたりしい。その口もとが、きゅつと引き結ばれる。

「すぐ近くだ。いけつ」

「おうさ」

アイシャが手を放し、その手でとん、とおれの背を押した。

風の魔術が込められていたのだろう、おれはさらに加速する。そして地面を蹴り、おおきく宙を舞う。

茂みを飛び越え、木立を抜け、景色が高速で切り替わる。

邪魔な枝葉をまとめてへし折り、おれは空中でバランスを維持しながら矢のように飛ぶ。木々の向こうに、ヒトの背丈の倍近い、黒い巨大な影がみえた。

魔物だ。

おれは近くの大木を軽く蹴り、進路を変更、その巨大な影がけて突進する。剣に霊気を込め、振りかぶる。

すれ違いざま、斬撃を見舞う。

巨大な影の、その首を一撃で刎ね飛ばす。

おれは反対側の茂みに飛び込む寸前、振り返って、それを見た。
首を失った巨大な猪の魔物が、青い血しぶきをあげながらその身を地面に横たえるさまを。

その少し脇で、頭を抱えて悲鳴をあげる女の姿を。

どうやら、この猪の魔物に襲われて、女は逃げ続けていたようで……。

間一髪、助けることができたか。

そう思ったとき、おれの剣の刀身が微塵に砕け散った。

どうやら、いまの靈気を込めすぎた一撃に耐えられなかったようだ。

なまくらにしてはよくやったさ。そんなことを考えながら、おれは柄だけとなった剣の残骸を放り投げ……。

ついた勢いのまま、己の身を茂みの向こう側に投げ出した。

*

おれが倒した猪の魔物は、名をボールド・ボアというらしい。助けた女性が教えてくれたことだ。

彼女の名は、ノーラ。

薬草をとり村からひとり、この森のなかに分け入って、運悪くボールド・ボアに襲われたのだという。

「ノーラ！ あなただったのね！」

「お嬢さま！ どうしてここに！」

その女性は、遅れてやってきたアイシャと、ひしと抱き合っていた。

アイシャのかつての侍女にして、おれたちが目指していた村の知り合い。おれが助けたこの女は、そんな素性の持ち主であった。

これもまた、縁か。

おれは、ノーラという女を観察する。三十代後半くらいの女性で、小太りながら、手足はがりがりに痩せて顔色も悪そうだった。

「会えてうれしいわ、ノーラ。わたし、ずっとノーラに会いたかったのよ」

「こちらこそ、心配しておりましたよ、お嬢さま。王都でぶっそうなことがあったって、村でも持ちきりだったんですから」

「そう、ね。いろいろ、あった。でもみての通り、わたしは、わたしだけは、こうして無事だったわ」

ところで、さつきからアイシャの口調が気持ち悪い。

なんだこのお嬢さま口調。

これがアイシャザックの記憶を取り戻す前の口調なのはわかるのだけでも。

アイシャは、ちらりとおれのほうをみて、わかっているなとばかりにうなずいた。
わかっているさ、おれだって少しは空気を読む。

ここでちゃちゃを入れたりはいらないって。

アイシャは手短に、王都であったことを説明した。

己の家族がどうなったかも。

ノーラは、天を仰ぎ、それから泣き出してしまった。

「おお、おお……旦那さまも奥方さまも……。なんて、なんてことでしょう」

「いいの。もういいのよ、ノーラ。すべては終わったことなのだから」

ああ、むずがゆい。

ツッコミを入れたい。

おれが背中を掻いていると、アイシャはノーラのみていないところで中指を立てておれを威嚇した。

「おいたわしや、お嬢さま。身ひとつ、使用人もこの男ひとりで逃げてきたのですね」

「ええ、そうなの。だいじょうぶ、コガネは信頼できる男よ。みてくれは、この通りだけ



ど」

なにがこの通りなんですかね、お嬢さま。

たしかにいまのおれは、監獄城の兵士から奪った革鎧を着ているだけ。どこかの三下と思われても仕方のない格好だが……。

ためー、あとで覚えてろよ。あと、侍女のみてないところでペーっ、と舌を出すのやめろ。

「ところで、ノーラ。どうして狩人でもないあなたが、ひとりで葉草探などしていたの」

「それが……お嬢さま、じつはいま村は、たいへんなことになっていまして。お嬢さまに頼られるのは嬉しいのですが、その、村には来れないほうが……」

「たいへんなこと？ ノーラ、どうか話していただけないかしら」

アイシャが訊き出したところによると、いまノーラの住んでいるハイジャ村には、軍の一部隊が駐留しているらしい。

実際は王都の混乱から逃げ出した者たちの集まりで、統制を失った荒くれものたちが、じつに五十人あまり。

「やつらは野盗同然なのです」

数日前から村を占拠し、好き放題にしているという。

村の男たちは外に出ることを禁じられ、若い女たちは……まあ、ノーラが口を濁すようなことになっているらしい。

彼女自身は、機転を利かせた夫が、子ども数人と共に村の外の小屋に逃げるよう促したため難を逃れたようだ。

狩人が森を監視するためにつくられたその小屋で、ときおり村の様子を観察しながら子どもたちの面倒をみていたノーラだが……。

子どものひとりが、熱を出してしまったのだという。

ノーラは唯一の大人として、葉草を採取しに森の奥に向かい……しかし普段と違い狩人の案内もなく、迷ってしまったに至る、とのことだった。

「ちなみに、本来の小屋の持ち主である村の狩人は？」

「まささきに、殺されました。横暴な兵隊さんに抗議して、その……。優しく、勇敢な

かたでしたよ、お嬢さま」

ノーラは、また泣き崩れてしまう。

アイシャと会って、気持ちが切れてしまったのかもしれない。
「とにかく、ノーラ。葉草はもう採れたのね。じゃあ、はやくその小屋まで戻りましょう。もう日が暮れるわ。コガネは屈強な男だけど、夜は魔物の時間よ。子どもたちも待ってい

るのでしょうか？」

アイシヤはノーラを促す。

いやあ、堂にいったお嬢さまっぷりだ。

おれは必死で笑いをこらえて……あ、こらアイシヤ、おまえノーラがみてないところで膝に蹴りを入れるな。

「コガネおぬし、あとで覚えておくがいい」

小声でそういつて、膨れつつらで、おれを睨む。

はいはい、ノーラがこつちを向くぞ。

ころっと態度を変えて、アイシヤは「行きましょう、ノーラ」と小川の流れるように澄んだ声を出す。

おれの腹筋がやばい。

やばいが、いまはこらえるしかない。

*

アイシヤは、十五歳の誕生日に前世である邪竜アイシヤザックの記憶が蘇ったという。では、それまでの彼女は、いったいなんだったのか。

前世の記憶がなかったころの彼女は、消えてしまったのだろうか。

消えているわけではないのだ、と彼女はいう。

過去と現在の記憶が混ざり合い、新しいアイシヤになっただけなのだと。そもそも、記憶なんてものはアイシヤという人格を構成する要素のひとつにすぎないのだと。

おれには、詳しいことはわからない。

ひとつたしかなこととして、彼女は「過去の自分」と「いまの自分」を使い分けることができるということだ。

いまこうして、ノーラを前に「おしとやかな貴族の令嬢」を演じているように。

最初におれと会ったときの態度、口調は、それが「ふさわしい」からそう演じたにすぎない、と彼女はいう。

尊大で、傲慢で、豪胆。

それこそが、邪竜アイシヤザックの生まれ変わりとしてふさわしい態度であろうと。それこそが、邪竜を退治した勇者のひとりに相対するにふさわしいのだと。

彼女は、そう信じ、おれの前で演じてみせた、らしい。

だから、なにがほんとうの自分なのか、というのは彼女にとってどうでもいいことなのだという。

どちらもほんとうの自分であることに疑いはないのだから。

おれにそう念を押して、彼女はノーラとの会話に戻っていく。

「小屋に食料はどれだけ残っているのかしら。ボールド・ボアの肉を持っていきましよう。コガネ、お願いするわね」

「へいへい、お嬢さま」

「へい、はいちどいいの！ まったく、もう。コガネは礼儀を知らないのだから」

おれは、アイシャのお嬢様口調に笑いをかみ殺しつつ、ボールド・ボアの解体を手際よく終わらせた。

魔物の血は青いが、肉に関しては動物となんら変わりがない。

魔石も回収しておく。ウォーモモンガの魔石と違い、大人の拳ぐらいいはある大型の魔石で、鈍色に輝いていた。

「きつと、子どもたちも喜びます。昨日から、ほとんどなにも食べるものがなくて」

「それはたいへんだったわね。だいじょうぶよ、コガネは狩人としても優秀だから。きつと、全員を養ってあげられるわ」

なにいつてやがる、とおれは心のなかで考える。

風の魔術を得意とするいまのアイシャは、ただ動物を狩って肉を得るだけなら、おれな

んかよりよほど優秀に違いないのだ。

彼女が竜としての能力を隠そうとすることじたいは、間違つてないと思うのだが。

単純に、いまノーラを警戒させても話が面倒になるだけだからだ。

ひとまずは状況を掴み、これからの指針を決めることを優先している。おれも、その方針に異存はない。

おれたちは、ノーラの案内で村の近くの小屋まで赴いた。

森のはずれ近いところにあるものの、巧妙に隠蔽された狩人の小屋に。

ノーラの声を聞いたのか、瘦せた子どもたちが泣いて出てきた。

*

小屋にいた子どもたちの年齢は、おおよそ五歳から十歳。

男の子がふたり、女の子が三人で、そのうち臥せていた男の子はノーラが調合した薬を飲んだあと安らかな寝息をたてはじめた。

この様子なら命に別状はないだろう、というのが彼女の見立てであった。

残りの面々で、鍋を囲んだ。

もちろん、主食はボールド・ボアの肉だ。子どもたちは、競い合うようにガツガツと肉

をむさぼった。

「慌てなくても、いっぱいあるから」

ノーラが苦笑いしているが、これまでの食糧事情を考えれば子どもたちの気持ちは理解できる。

なにより、おれもかなり腹が減っていた。子どもたちに負けず、肉をむさぼり……アイシャに「恥ずかしい従者ですね」と笑われてしまった。

仕方がなかったのだ。

なにせ、さきほどいちど魚を食べたとはいえ、空腹という感覚そのものが五百年ぶりだったのだから。

それはあまりにも強烈な欲求で、そしてそれを満たすことは想像を超えて甘美だった。幸いにして、ノーラがいう通り、肉はたっぷりとあった。

なにせ普通の猪よりはるかに巨大なボールド・ボアの肉である。

さすがに全部は持ちきれなかったのだが、もしすべての肉があれば、一日の村ひとつぶんの食料を賄えるほど、といわれるくらいだ。

もつとも、味に関してはたいしたことがないらしいのだが……。

誰がいったか、空腹は最高の調味料。

その言葉の通り、おれたちは競うように肉を喰らいまくり、アイシャを呆れさせた。

子どもたちは、食事のあと、糸が切れたように寝てしまう。

空腹を抱え、ノーラを待って不安なときを過ごしていたのだらう。無理もない。

「さて、ノーラ。村のこと、村を占拠したもののたちのこと、詳しいことを教えていただけるかしら」

アイシャは、これからは大人の時間だとばかりに、かつて侍女だった女に訊ねた。

ノーラは「お嬢さまを巻き込むことなどできません。明日の朝、すぐにここを去ったほうがよろしいのです」といつてきかなかったが、その氣遣いを断固として拒否しての質問である。

「ですが、お嬢さま」

「ボールド・ボアを一撃で倒したコガネのちから、信じられませんか」

アイシャの言葉に、ノーラがおれをみる。

お嬢さまのご命令だ、おれは、せいぜい頼もしくみえるよう、不敵に笑ってみせた。

「で、ですが。相手は、訓練を受けた兵士が五十人以上ですよ」

「数は問題にならないわ、ノーラ。それに……驚かないで、よく聞いて欲しいの。じつは、わたし、魔術が使えるようになったのよ」

アイシヤは、簡単な風の魔術を行使してみせた。

ノーラは目を丸くして、「いったいどうやって」と首をかしげている。彼女が仕えていたころのお嬢さまには魔術の才能など欠片もなかったのだろう。

そう、魔術は才能によるところがおおきい。

使えない人間は、どれだけ努力しても使えない。たとえ、どれほど強大な靈気があつてもだ。

逆に、才能さえあれば幼くとも少しの訓練で第一階梯、第二階梯の魔術を操ることができさる。

さすがに、第三階梯の魔術には、相応の修行が必要らしいが、おれはそのあたりに詳しくない。魔術の才能など、これっぽっちもなかったのだ。

もしおれに才能があつたら、たとえ孤児院の出でも貴族に拾い上げられ、もつと楽な子ども時代を過ごしたかもしれない。

その場合、邪竜を退治した勇者のひとりになることもなく、貴族の私兵として使いつぶされる人生だったと思うが……。

「いまはみせてあげることができないけど、わたし、空を飛ぶこともできるのよ。このちからとコガネのちからを組み合わせれば、きつと兵隊たちを追いつぶることができるわ」

「そ、そうでしょうか、お嬢さま」

「だから、お願い、ノーラ。あなたが知る限りのことを教えてちょうだい」

お嬢さまの言葉を、どこまで信じたのだろう。

ノーラは迷ったすえ、彼女が知る限りの村の情報を開示してくれた。兵士たちについて、みたこと聞いたこともすべて。

幸いにして、村を占拠したものに高度な魔術の使い手はいないようだ。せいぜい、火や水、風、土の第一階梯が使える程度である。このあたりの魔術は、日常生活には便利だが戦闘では問題にならない。

いまのおれを包む靈気を破つてこの身に傷をつけるには、せめて第三階梯の魔術は必要である。

彼らの装備も、ぼろぼろのようだった。

軍馬は一頭たりともなく、ほとんどの兵士が長槍を持っていないようだ。これでは、まともな軍隊としての行動など不可能だろう。

いや、違うのか。まともな軍隊ではなくなったからこそ、こうして近くの村まで逃げ延びたのか。

彼らはきつと、王都の騒乱で負けた者たち、敗残兵なのだろう。

王都で負けた者たちが、この村のひとびとを搾取^{さくしゆ}している。より弱い者たちを踏み^ふにじっている。

おそらくあと十日もすれば、食料もなくなり、彼らはこの村から出ていかざるを得なくなるだろうが……。

そのとき、村のひとびとはもう、再起するちからすら失っているに違いなかった。いま、ここでおれたちが立ち上がらなければ、きつとそうになってしまうだろう。

「手伝うのか」

おれは、ノーラが用を足しに小屋を出た隙^{すき}に、小声で訊ねる。

「うむ。村を解放する」

ノーラの目がなくなつたからか、アイシャは傲岸不遜^{ごうがんふそん}な口調に戻^{もど}り、そう断言してみせた。

瞳^{ひとみ}を炎^{ほのお}のように燃え上がらせ、にやりとしてみせる。

「ノーラは、われにとって大切な者である。助けることにためらいはない。コガネ、おぬしには手伝う理由がなかるうが……」

「やるさ。いばりくさつた傲慢な兵士なんて、おれが二番目に嫌^{きら}いなものだからな」

「すまぬな、コガネ。……いや、ここは感謝の言葉をかけるべきであらう」

ところで、とアイシャは首をかしげる。

「今後のために聞いておこう。おぬしがいちばん嫌いなものとは、いったいなんだ？」

「そりゃ、いばりくさつた生意気な貴族さ」

「それは誰のことであるか」

咎^{とが}めるように下唇^{したくちべ}を突き出すアイシャをみて、おれは笑う。

*

翌日、早朝。

不安そうなるノーラと子どもたちを小屋に置いて、おれとアイシャは村の様子が一望でき^{おか}る丘^{かみ}の上に立っていた。

粗末^{そまつ}な柵^{さく}が、四、五十戸の村をぐるっと囲っている。

柵の内側に、弓を手にして、ぼつりぼつりと立つ兵士たちの姿がある。その鎧^{よろい}は傷つき、ほころび、ぼろぼろだった。

あまり真面目に見張りをしているわけではないようで、柵によりかかり、居眠^{いねむ}りしている者も多い。

「やれやれ。早朝の奇襲^{きしゆう}なんて、見張りがいちばん警戒するべきじゃないか」

「敵の気が緩んでおるのはよいことであろう、コガネよ」
「ま、そりやそうだ」

最初は、おれが正面から乗り込もうと思ったのだが、それはアイシヤに止められた。相手が村人を人質にした場合、厄介だからだ。

とはいえこの様子ならば、あまり凝った作戦を弄する必要もないだろう。おれとアイシヤはうなずきあう。

『《優しき螺旋の風、彷徨う大気の精、集い満ち巡り舞い、われらが身に纏う翼となれ》』
アイシヤが風の第三階梯を使用する。

おれと少女の身体が、ふわりと宙に浮きあがった。

鳥のように宙を自在に飛ぶことができる魔術、フライングである。

この魔術、靈気の消費が激しいとのこと。

アイシヤがギリギリまで靈気を絞り出しても、ふたりに飛行して、ゆつくりと二百を数えるくらいしか保たない。

そのあと彼女は疲れ果てて、なんの魔術も使えなくなってしまう。

今回は、村までさしたる距離がないため、充分に靈気が保つだろうと判断した。空中から強襲できるメリットのほうが、ずっとおおきい。

おれとアイシヤは天高く舞い上がり、村へ近づく。

幸いにして、兵士たちは地上ばかりみて、おれたちの接近に気づいていない様子だった。

よし……行くぞ！

おれたちふたりは、村の柵を越えたあたりで急降下する。

ハイジャ村の人口は、二百人ほど。

そこに五十人もの兵士が住み着こうというのだから、家の確保だけでもたいへんなことだ。この村を占拠した兵士たちは、元の住人を追い出し、わがもの顔で村の中央付近の家々を使用しているという。

ノーラの話によれば、女たちが人質にとられているらしい。

彼女たちを救出しつつ、兵士だけを叩きのめす必要がある。

空を飛んだおれとアイシヤは、見張りの兵士たちのはるか頭上を素通りして、村でもっともおおきな、木造りの屋敷の屋根に降り立つ。

間違はなく、ここが村長の家だろう。

静かに、すんと着地したおかげで誰にも気づかなかったようだ。

村を占領している兵士など何人束になってもおれたちには敵わないだろうが、村人を人質にとられると厄介だ。

よつてまずは、この屋敷を静かに奪還する。

「頼むぞ、アイシヤ」

「うむ。……《貴き大氣の精よ、静謐にあれ》」

屋根のうえで身を低くして、アイシヤが魔術を行使する。

風の第二階梯、サイレント・ウォールは、空気の流れを遮断する壁を周囲に張り巡らせる魔術であつた。

つまり、これからこの屋敷でどんな騒音を立てても、外には物音ひとつ漏れないということである。

「われは、ここで結界を維持する。コガネよ、あまり派手にやるなよ」

「わかつてる。任せっておけ」

おれはアイシヤと分かれ、屋敷の裏口に降り立った。

ノーラから借りてきたナイフを腰から抜きかけるが……少し考えて、それはやめておく。無防備に開いていた裏口のすぐ内側に、戦士ではない人間の気配があつたからだ。

足音を忍ばせ、素手のまま内部に侵入する。

裏口から入ってすぐのところに、炊事場があつた。

ふたりの若い女が、半裸で料理をしているところだつた。

見知らぬ男が裏口から入ってきたことに驚く女たちに対して、おれは口もとにひとさし指を立て、黙るよう指示する。

女たちは怯えた顔で、コクコクとうなずく。どうやら、兵士たちのひとりと勘違いした様子であつた。

暴力を恐れているのだろう。

よくみれば、ひとりの女の頬に、青痣がある。もうひとりの女は、すらりと伸びた腕と脚に包帯が巻かれていた。

「ノーラに頼まれて、助けに来た。彼女がもともと働いていた、王都の屋敷の者だ」

おれはこみあげる怒りを押し殺し、小声でそう告げる。

女たちの顔が、歓喜に染まる。

だがすぐ、不安そうに背後を振り返った。

「兵隊さんは、大勢いるよ。あんたひとりじゃ」

「問題ない。おれは、こういうことの専門家なんだ。王都には、不埒を働いた兵士を専門に始末する機関がある」

適当なことを語ってみると、女たちは、そういうものかと納得してしまった。自信満々にいつてみるもんだな……。

五百年前の帝国には、そういう部隊があっただけだね。

「ところで、あんた。へんな訛りをしているね」

「そ、そうか？」

ひょっとして、五百年の間に言葉も少し変化したのだろうか。こんご、気をつけたほうがいいかもしれないな……。

幸いにして、女たちは、王都のほうではそういう言葉遣いをするのか程度に思っているようだが……。

彼女たちに聞いたところ、この屋敷にいる兵士はぜんぶで六人。

そのうち五人は大広間に寝泊まりし、ボスの男だけは村長の部屋を使用しているという。ちなみに、兵隊の隊長は、名をドルガというらしい。

「この屋敷に捕まっている女たちは？」

「うちの妹が、村長の部屋……ドルガのところに。あと大広間には、あたしより若い娘が三人」

「先に、大広間から片づけるか」

ここは敵の人数を減らすことと人質の解放を優先する。

いちばん厄介なのは、兵士の誰かが逃げて仲間におれたたちの襲撃が伝わることである。

「隊長のドルガは、めちゃくちゃ強いよ。うちの村でいちばん剛力だったバドも、あつという間に殺された。あんたも気をつけな」

「そうか。教えてくれてありがとう」

「その顔じゃ、わかってないね。ドルガは、魔剣技を使えるんだよ」

魔剣技。

おれは監獄城で戦った大男を思い出す。

彼女がいうには、ドルガという隊長は、剣から炎を出し、その剣で斬りつけて村人たちを焼き殺したという。

監獄城の男は、炎なんて使わなかったな。

魔剣技とは、魔術の一種なのだろうか。

この女性も、兵士たちの噂話を聞いただけで、魔剣技というのがなにかはよくわかっていない様子である。

「あと、そうだ。あんた、これを持っていきな」

女たちが、台所の床板を外す。

覗きこんでみると、よく手入れされた剣が、豪華な装飾の鞘に納められ、安置されていた。

剣から、わずかに靈氣を感じる。

「うちの村に伝わる剣だ。父……村長が、殺される前に、ここに隠せて。役に立ててくれよ」

おれは遠慮なく剣を手にとり、鞘から抜いた。

思った通り、刀身からかなりの靈氣が溢れ出している。靈劍の類だろう。

「うちの村のいいつたえが本当なら、五百年前に邪竜を倒した勇者さまのひとりが身に着けていた剣らしいよ」

おれは笑った。

それはない、と知っていたからだ。とはいえ、なかなかの名剣であることは間違いない。銘をみる。

ナヴァ・ザグ、とあった。

おとぎ話に出てくる、ヒノキの枝で悪い鬼を打ち払う小人の名だ。

「頼もしいな。頼りにさせてもらう」

おれは剣を片手に、足音を忍ばせ、女たちに案内されて大広間に向かった。

酒の匂いがひどい。五人の男が、広間のソファでいびきをかいていた。

男たちのそばの床には、半裸の少女たちが転がっている。

ぜんぶで、三人。

おれは、案内してくれた青痣のある女とうなずきあい、数が合っていることを確認する。

「人質を逃がすのは、任せた」

「は、はい」

おれは大広間に飛び込む。ひとりの男がねほけ眼で起き上がり、迫るおれをみて目を剥くも……。

男が口を開く前に、その首筋に靈劍ナヴァ・ザグを叩きこんだ。

男の頭が、宙を舞う。

切断された首筋から血しぶきがあがり、相手は悲鳴をあげることにすらできず絶命した。おれは残る四人が目覚める前に、それぞれ一撃で仕留めていく。

女のかん高い悲鳴が、あがった。

振り返れば、目覚めた少女が剥き出しの胸を隠しめせず、おれをみて叫んでいる。おれをここまで連れてきた女が、慌てた様子でその子に駆け寄り、宥め出した。

「あー、すまん。刺激が強すぎたか」

「悪いけどあんた、血まみれのその姿、おとぎ話の悪鬼にみえるよ」

おれは、苦笑いして首を振った。

五百年前、おれに対する告発文に、悪鬼のごとき大虐殺、という一節があつたことを思い出してしまったのである。

無論それは濡れ衣、真つ赤な嘘だったのだが……。

「おれは、怖いかな」

「いや」

青痣のある女は、泣き出してしまった少女をぎゅっと抱きしめたまま首を横に振った。

「いや、いや、いや。あんたは全然怖くないよ」

「すまん、気を遣わせた」

「いいんだよ。……だから、そんなに傷ついたような顔をするのはやめとくれ」

そうか、とおれは剣を持っていないほうの手で己の頬を触った。

おれはそんな、情けない顔をしていたかと。

おれの気持ち、か。

いわれて初めて、少し考えてしまう。はたしておれは、五百年前、どんなことを考えて……。

と、大広間の奥の廊下が騒がしくなる。

おおきな足音を立てて、やってくる者がいる。

「てめえら、いったいなにを騒いでやがる！ ……おい、この血の匂い、どういうことだ。まさか、喧嘩でも……」

だみ声の男の声が響く。これは……好都合、か？

青痣のある女は、ほかの女たちを急ぎ立てて反対側の廊下に走った。

彼女たちが大広間から消えた直後、大柄な男が、のっそりと奥の廊下から顔を出す。

部下に対する脅しのつもりか、みせびらかすように曲刀を構えた、革鎧の兵士長だ。

この男が、ドルガか。

「てめえ、誰だ」

ドルガが部屋中央に立つおれを発見し、睨みつけてくる。

血まみれの男が部下の惨殺死体の前に立っているのだ、よほど血の巡りが悪くなければ

状況は理解できただろう。

おれは、不敵に笑ってみせた。

「誰、と問われれば、コガネだ、と返事をしよう。邪竜殺しの勇者だ」

「はっ。おとき話の英雄の名を騙って、なにが楽しい」

おれが、おとき話、か。

思わず笑ってしまった。

「あんなバッドエンド、おとぎ話には似合わないだろう」

「わけのわかんねえこといつてんじやねえ！ 死ね！」

ドルガがソファを飛び越え、襲いかかってくる。

横薙ぎに振るわれる剣は、たしかに、それなりの一撃だった。

この曲刀が霊剣のようににはみえないが、村で一番程度の腕自慢では太刀打ちできなくて無理はない。おそらく、軍でもなかなかの使い手なのだろう。

おれは後ろに跳んで距離をとる。

「よく避けやがったな」

「なに。おまえの本気をみてみたくなってな。……魔剣技つてやつ、出してみろよ」

「自分から殺して欲しいと願うとは、なんとも殊勝なやつだ」

ドルガは傲岸不遜に笑う。おれは目を細めて、彼の身体をとりまく霊氣の流れを読んだ。

彼の持つ曲刀に霊氣が集まってくるのがわかる。

「《猛る炎刃》」

ドルガの剣から炎が迸る。

炎の一部が床を焼き焦がす。どうやら本物の火のようだ。

「なるほど、ね」

だいたい、どういうものかわかった。

「王都ではそういう手品が流行っているのか」

「てめえ、この火の怖さがわからねえとは、どれだけ愚図なんだ？」

「いや、わかるつもりだ。それは火の魔術だな」

これは武技ではない。

間違っても五林の技でも、その発展形でもない。

彼は、ただ魔術を行使しているだけだ。

五百年前も、魔術と剣を高いレベルでこなす者はいたが……それをこうして組み合わせる者はいなかった。

「たいしたものだと思うているよ。いいものをみた」

「なら、札に死ね！」

ドルガは炎に包まれた剣を振りかぶる。

おれに向かって突進してくる。

炎の斬撃がおれを襲う。

「たいしたものだけど、さ」

自分に対する際限ない自信が、肥大化しすぎたのだろう。その傲慢が、村をひとつ占領

するなどという無謀^{むぼう}を決断させたのか。

「どうにも、実戦的じゃない気がするな」

おれは男の一撃に対して、構えた剣で迎え撃^{むか}つ。この村の宝であるという剣の刃^{やいば}に、霊気を込める。

「風林が一刀、皆伝^{かいでん}。コガネ、参る」

ふたつの剣が打ち合わされる。

炎に包まれたドルガの剣^が、微塵^{みじん}に砕^{くだ}けた。

ドルガは吹き飛ば^ふされ、壁^{かべ}に頭^{くちだ}を打ちつけ、口から泡^{あわ}を吹いて失神してしまう。

「やれやれ、受け身もとれないのか。剣技を磨^なぐより前に鍛^{きた}えるものがあるだろうに」

おれは、村の宝の剣を確認した。

刃こぼれひとつしていない。いい剣だな、と思う。

対して、ドルガの武器は、あまりにも脆^{もろ}かった。

彼の魔剣技のせいだ。

繰り返し火の魔術をかけられたあの剣は、もう限界に近かっただろう。

魔剣技。試みとしては面白いかもしれないが、おれとしては五林の武術に一日の長があると思う。



もつとも、この男の場合は剣の技術も魔術もまだまだ未熟だったのだろうか……。

「もつと腕のあるやつとやってみたいな」

思わず、ぼつりと呟いてしまった。いかんいかんと首を横に振る。

改めて、気絶した男を見下ろす。

こいつは、いまはまだ殺さない。

あとで尋問して、王都の状況やなぜ逃げてきたのかを確認しなければならない。そのあとは……憎悪にかられているであろう村人たちに預けるのが、てっとり早い。

「それじゃ、村を解放するぞ！」

廊下で様子を見守っていた女たちに、そう声をかける。

隊長の男を縛りあげて口枷をはめたあと、屋敷の裏から出て、屋上のアイシャに合図する。

もと貴族令嬢は、サイレント・ウォールを解除したあと、純白のドレスをひるがえし、慣れた様子で屋根から飛び降りた。

「もう安心ですわ、みなさん」

アイシャはドレスの裾をつまみ、屋敷に囚われていた女たちに礼儀正しく挨拶してみせた。とんだおてんばお嬢さまもあつたものである。

しかし、そもそも貴族をろくにみたこともない村人たちは、あまり違和感を抱いていないようだ。

昨日は獣道の行進で多少、薄汚れたとはいえ、この場にはあまりに不釣り合いな格好なのだが……。

彼女の騎士であるおれが、兵士たちを手際よく始末してみせたからだろうか。

「村の男たちは外のほうの小屋に押し込められています。付近の見張りを倒していただければ、あとはわたしたちが」

という娘たちの意見を聞いて、アイシャはおれをみる。

おれは少し考えたすえ、それでいこうとわずいてみせた。

村人たちが、自分たちで村をとりかえしたという事実は、今後を考えて大切だと思ったからだ。

ひとが生きるには、矜持が必要だ。

村人たちは、誇りを取り戻す必要がある。

たとえ、そのために犠牲が出るとしても。

「殺したやつらの武器を持って、ついてきてくれ」

女たちのうち、元気なふたりを連れて、おれとアイシャはそつと屋敷をでた。

村のあちこちの家に分散しているほかの兵士たちは、この時間、ほとんどがまだ寝ているらしい。

見張りの者も、外にばかり意識がいつているようだ。

「わたしを中心として、魔術で足音を消します。わたしから離れることなきよう」

アイシヤがそう命じて、サイレント・ウォールを行使した。

周囲から、音が消える。

今回は場所にかけるのではなく、アイシヤ自身とその周囲すべての音を消しているようだ。

おれとふたりの娘は、アイシヤを囲むようにして、小走りに駆け出す。

身振り手振りで合図しながら目的となる小屋の近くまで来てから、おれひとり、そつと彼女たちから離れ、小屋を見張るふたりの兵士へ背後から近づき……。

相手が声を出す前に、ふたりの兵士の頭をわし掴みにすると、地面に押し倒す。

たつぷりと靈気を込めた一撃だった。

骨が折れる音と共に、ふたりの兵士の頭部が潰れる。

土煙が舞い上がった。

「ばかもの、やりすぎである！」

貴族令嬢の演技を忘れて、アイシヤが大腿で駆け寄ってくる。彼女の声が聞こえているということは、サイレント・ウォールを解除したのだらう。

幸いにして、村人たちはアイシヤの変貌に気づかなかったようだ。女たちは、小屋の戸を開けて、男たちを解放するのに忙しかったからである。

男たちが大騒ぎする前に、ことの次第を伝えていく。

「外周にいる見張りの兵士たちは、コガネ……その従者がやります」

アイシヤはおれを指さし、救い出された男たちに告げる。

おれはぞんざいに手をあげた。へいへい、お嬢さまの下僕としてせいぜいがんばりますよ。

「みなさんは、家のなかで惰眠をむさぼる兵士をお願いします。人質にされた村の娘たちを救い出すのは、あなたがたの役割でしょう？」

真剣にうなづく男たちに、殺した兵士から回収した武器を渡していく。

何本かの剣は刃こぼれしていたし、矢の数は驚くほど少ない。

彼らは王都の騒乱に敗れ、かろうじて逃げ出すことができた程度の敗残兵とのこと。

そんな落ち武者どもでも、村ひとつに対して横暴を働くには充分だった。

国が荒れるとは、そういうことなのだ。

帝国が失われてからの大陸は、どれほどの騒乱に巻き込まれていたのだろうか。おれは、てきぱきと村人に指示するアイシヤをみて、亡き想い人を思い出す。あのひとは、国が荒れ滅びを迎える光景をみて、どれほど心を痛めたのだろう。彼女はそんな状況でも、なんども危険を冒し、おれのもとへ会いに来てくれて……。

アイシヤはこちらへ振り向き、きつい目で睨んでくる。顔を近づけ、小声でささやく。

「ぼやばやするでないぞ、コガネよ」

「わ、わかつてるって」

「おぬし、われに別の者を重ねておるな」

鋭いな、こいつ。

おれは少女の観察眼に舌を巻く。

ごまかすように後ろ頭を掻いた。

「まあ、よい。好きにせよ。おぬしにも、長く抱えるものがあろう」

「そういうわけでも、ないんだがな。しょせん、過去は過去だ」

「過去を背負わぬ者に、未来をみることはできぬ」

とても十五の娘がいう言葉ではない。

それは、さながら竜が矮小なヒトを見守るような、優しいまなざしだった。敵わないな、と思わずため息がでる。

「さ、行きなさい、コガネ。あなたが、わたしたちの要なのですよ」

アイシヤは貴族の娘らしい声色に戻すと、ぼん、とおれの背を叩いた。

「へいへい、お嬢さま」

「へい、はいちどでよろしい。まったく、もう。素直じゃないんだから」

困ったものね、と腰に手を当て嘆息するお嬢さまに、周囲の男たちが笑顔になる。

かわいらしいものをみた、とても思っているのだろう。

それからの作戦は、おおむね思った通りに進んだ。

おれが見張りたちの大半を始末したところで、村のあちこちから悲鳴と怒号が響き始める。

残る見張りを倒すころ、戦いは佳境を迎えていた。

大半の兵士は、怒れる村人によって殺されていた。

機敏に逃げ延びた少数は、アイシヤの魔術によって宙を舞い、地面に叩きつけられたところを、復讐に燃える女たちによってリンチにあった。

各個撃破された五十人の兵は、あっけなく全滅した。

ここに、ハイジャ村の奪還は成ったのである。

*

村を占拠した部隊で唯一の生き残りである隊長は、おれの立ち会いのもと、アイシヤが尋問した。

こんな汚れ仕事、普通に考えて十五歳の少女で貴族の令嬢にやらせることではない。

だが、王都のことを訊ねたくともおれも、村の人々も最近の王都の情勢についてあまりにも無知であった。

幸いだったことは、ふたつ。

アイシヤがただの十五歳の娘ではなく、前世の記憶を持った、ある意味で超越的な存在であったこと。

そしてドルガというこの隊長は、案外根性なしで、おれが数発殴っただけで素直になったということだ。

「王都では四つの勢力に分かれて殴り合いをしているとはね。地獄もいいところだ」

「その地獄から逃げ出したこやつらの気持ちも、わからんでもない」

アイシヤはそういつて、裸に剥かれ後ろ手に縛られた男の尻を蹴った。

少女の目には、隠そうともしない嫌悪の色がある。

殺意をこらえているのがわかる。

なにせ、こいつらの部隊が王都でやったことは……。

「親の仇が、こうもあっさりみつかるとはのう。別に探してもいなかったのだが」

そう、ハイジャ村に逃げ込んだ部隊は、王都の騒乱に乗じてアイシヤの屋敷に押し入り、親兄弟使用人のすべてを虐殺した者たちだったのだ。

強盗の理由も判明していた。

物取りである。

ただの押し込み強盗。

本来は都を守るべき兵士たちが、それをやった。

けっきょく、その屋敷にはろくに金目のものがなかったとのことで、襲い損となつてお尋ね者となり、そのまま王都を逃げ出した。

この男、金が手に入らなかった腹いせに死体損壊でうさを晴らしたとかいいだったので……。

アイシヤがなにかする前に、おれが素早く動き、両腕の関節を外しておいた。もと兵士長は、悲鳴をあげてのたうちまわる。

「申し訳ありません、お嬢さま。つい手が出ました」

「わかっておる、われが手を下すほどの者ではない。村人にくれてやらねばならぬしな。……不思議であるよ、竜であったころは、家族という概念すら理解しておらなんだ。それがいまは、こうして腸が煮えくり返るような思いを持って余っている。面白い」

面白い、といいながら、少女はかく拳を握りしめている。

掌の皮が破れて血が流れ落ちているのに気づきもしないほどだった。おれは無言でアイシャの手を握り、拳を開いてやる。

彼女の掌に、軽く霊気を流す。

自身の爪によって裂けた掌から流れ出る血が、みるみる凝固した。

おれには身体の傷を治すうちからも、心の傷を癒す弁舌もないが、この程度のことはできる。

「手間をかけるな、コガネ。この身は竜より脆弱なれど、心の強さは以前と変わらぬと慢心していた」

「家族のために怒るやつを、心が弱いとは誰も思わねえよ」

アイシャは目を丸くして、おれをみた。

深呼吸ひとつほどの間、じっとみつめていた。

竜の生まれ変わりの少女は顔を伏せ、「そうか」とちいさく呟く。

「ヒトとは、そういうものか」

「ま、孤児のおれには、本当の家族つてものがわからんけどな。きみはもつと、自分の感情に素直になったほうがいい」

ちなみにこのやりとりの間、ドルガという兵士の生き残りはずつと、床を転がりまわっていた。

おれのほうに來たら軽く蹴っているが、アイシャはもう彼に触りたくもないようで、身をすくめて避けていた。気持ちはいくわかる。

「コガネよ」

アイシャはしばし考えこむように下を向いたあと、ふたたび顔をあげ、真剣な顔でおれと視線を合わせた。

「そのほうが、おぬしにとっても好ましいか？ そのほうが、おぬしはわれを好くか、という意味だ」

「なに真顔で聞いてきやがる」

「われは、ヒトの感覚を失わぬほうがいいのではないか、といま考え始めているところなのだ。おぬしがいることで、われはヒトであろうと己を律することができるであろうと」

おれは最初笑い飛ばしたが、どうやらアイシヤは本気らしかった。

昨日、彼女は、前世の記憶が蘇る前と後でなにも変わらないアイシヤであると宣言していた。

必ずしもそうではなかったのかもしれない。

いや、いまようやく、彼女自身がそのことに気づいたのか。

「おまえの好きにしろ」

「そうか」

「どっちにしろ、おまえがヤバいほうに向かつていったら……そのときは手を引つ張って、忠告くらいしてやるよ」

おれはぶつきらばうに、そう告げる。アイシヤは、その言葉のなにが嬉しかったのか、ぱっと顔をほころばせた。

「うむ」

と深くうなずく。

「それは、よかった」

*

魔剣技^{まけんぎ}のことも訊ねた。

ドルガによると、魔剣技とは現在の大陸において、剣技の極みとされる技術らしい。

彼は王都の道場の師範^{しはん}から習ったというが、そのためには高い金を払い、血のにじむような修練を積む必要があったとのこと、魔剣技の基礎^{きそ}すら習得できる者は十人に一人程度とのこと。

実戦で使えるレベルの魔剣技を習得できた自分はすさまじいエリートなのだ^じと自慢げに語っていた。

そのエリートさまでも裸にされて拘束^{こうそく}されて、これから縛り首^{しば}なんですけどね。

村を占拠していた兵士たちを叩きのめした、その日の午後。

おれとアイシヤは、慌ただしく出発した。

アイシヤとノーラの別れも慌ただしいもので、おれは少し申し訳なく思ったが……アイシヤがいうには、「これでよい。もはやわれは、貴族の娘^{むすめ}でもなんでもないのだから」とのことである。

出発を急いだ理由は、村人たちに気を遣^{つか}わせてしまおうからだ。

ただでさえ、食料は野盗まがいの兵士たちに食い荒^あらされ、男は多数、殺されている。そんな状況で、村人たちはおれたちを歓迎し讃^{たた}えるための派手な宴会^{えんかい}を開こうといって、

きかなかった。

さすがにそれは、とおれもアイシヤも全力で辞退した。

この先、村には多数の困難が待ち構えているだろう。

本当は、しばらく村に滞在してその手伝いができればいいのだが、おれたちは監獄城でさんざんに暴れたお尋ね者の身だ。当面の目標もある。

そういうわけで、食糧の補充すらせず出発したのだった。

おれとアイシヤなら、森の野生動物を狩るくらいは簡単なのだし。

村人から贈呈されたいくつかの装備については、ありがたく頂いた。

おれは、村の秘宝であったという靈剣ナヴァ・ザグを。

アイシヤは、ノーラの家の家宝という、ピンクスバイダー・シルクで編まれた靈衣を。

ピンクスバイダーは森の奥に棲む魔物で、その絹糸は魔術の発動を補助することでも有名である。

「村の秘宝や家宝を貰うなんて」

と最初は固辞していたのだが、こればかりはどうしても受け取って欲しいと押し切られてしまった。

これからの旅において、絶対に役に立つであろうと。

まったくその通りであるから、拒否することは難しかった。

かくしておれたちは、昼過ぎ、村人全員に見送られて出発する。

街道へは向かわず、むしろ険しい山脈へと足を向けた。それが、シルダリへの最短経路だからだ。

「シルダリ教国までは、われらの足でも十日はかかる。人里離れた山野を越える前提で、だ。それとも、コガネ。街道をおおまわりして、ゆっくり旅をするか？」

「いや、あまりこの国に長く滞在したくもないしな。人間を相手にするより魔物を張り倒しているほうが、よほど気が楽だ」

ところで、と獣道を歩きながら、アイシヤがくるくるとその場でまわる。

身にまとった靈衣が揺れて、虹色の露のようなものが飛び散った。

常人の目にもみえるほど凝固した靈気が、糸の先端からこぼれているのだ。

午後の日差しを浴びて虹色に輝く少女の姿は、なんだかとても幻想的だった。まるで、あのかたが蘇り、踊っているかのようで……。

「どうであろうか。ほれほれ、綺麗であろう。褒めよ、コガネ」

その言葉で、はっとする。

違う、彼女はあのかたじゃないと。

気を取り直し、おれはじつくりと少女の着る衣を観察した。

「おまえが靈氣を抑え込まないと、こんなになるのか。ピンクスパイダー・シルク製の装備はいくつもみてきたが、こんな綺麗な防具は初めてだよ」

「誰が服を褒めろといった」

アイシヤは膨れつつらで睨んでくる。

うるせえ、ガキか。

あ、こいつ地面から突き出た木の根にひっかかって転んだ。

「う、うぬう」

少女は起き上がり、むっすりした顔で泥を払う。

ピンクスパイダー・シルクの靈衣は泥水を弾き、汚れひとつこびりつかない。長旅には便利そうだな。

アイシヤが、またこつちをじつとみつめてくる。なにか言葉をかけろつてのか。

「あー、怪我がなくてよかったな」

「おぬし、われの先祖によく愛想を尽かされなかったな？」

心の底から呆れた顔をされた。

*

幸いにして、靈劍ナヴァ・ザグのおかげで道中の魔物はいつそうスムーズに退治することができるとができる。

警戒するべきは夜襲だが、これはアイシヤが風の第三階梯、ウインド・テリトリーで周囲の空気の動きを察知するという手法により、それなりの安全を確保した。

五百年前も、おれは大陸中を旅をしていた。危険な荒野を単独で踏破したこともある。普通の動物や魔獣であれば、気配だけで飛び起きることができた。

「順調、であるな」

「まあ、なあ」

険しい山を踏み越え、谷を飛び越え、地図と記憶を頼りにひたすら歩く。

数日が過ぎた。

予想通り、魔物に関してはなんの問題もなく退けることができたし、水も食料もさして困らなかった。

困ったことは、ただひとつ。

これがふたり旅で、おれが男、アイシヤは女だということである。

アイシヤは、なぜかおれにびったりくっついて寝ることにこだわった。

「おぬしの靈氣に包まれていると、安心する」

そんなことを、真顔でいうのだ。

ユーフエリアと同じ顔で。

正直、かなり、困る。

アイシヤは頻繁に悪夢でうなされているようで、貴族令嬢としての彼女の心は、だいぶ消耗しているのかもしれない。

ドルガの尋問をさせたのは、失敗だったかもしれない。いまさら、どうしようもないことではあるのだが……。

どうにも彼女、男を誘惑することについて、よくわかっていない様子がある。

おれのことを、頼りになる仲間として扱ってくれるのはとても嬉しいのだけれど。考えてみれば、十五歳の誕生日を迎えたばかりの、世間もろくに知らない貴族の娘、なんだよなあ。

そういうことに対して、竜としての長い生はあまり参考にならなそうだ。

彼女の心が弱っているいま、おれがしっかりしないとイケない。そう自分にいいかせ、旅を続けた。

険しい山をひとつ越え、ふたつ越え、前人未到の地を突っ切って進む。

みたこともない魔物を狩り、奇妙な植物を眺めた。

採取した果物のいくつかは、アイシヤの「竜だったころ、とてもおいしかった」という言葉を信じ、かじってみた。

たしかに、甘露としかいいようがない、なんとも表現のしようがない甘みが口のなかに広がる。お腹がたふたふになるまで食べ続けてしまった。

食べ終えたあと、身体中に靈氣が満ち溢れるような感覚を覚えた。

翌日には、その感覚は消えてしまったのだが……。

「靈脈の恵み豊かな地の動植物は、かように靈氣に満ちておるのだ。おぬしも五千年ほどこの地で過ごせば、竜に匹敵する靈氣を得られよう」

「気が長い話だな……。だから秘境の魔物つてのは強いのか」

「うむ。かつてのヒトが持っていて、いまは失ったもののひとつであるな」
靈草の類についても、アイシヤは詳しかった。

薬草のなかでも、強い靈氣が溜まった地で生育し特殊な靈葉の材料となるものを、靈草と呼ぶ。

竜は、古今東西の神秘について知識をたくわえるもののだと、そういつて胸を張った。
「竜だったころ、このあたりに来たことがあるのか」

「さあ、覚えておらぬ。記憶がない部分も多いし、なにせ竜の目で空からみると、こうして地上をノロノロ歩くのでは、みえる景色があまりにも違うのだ」

それもそうか、としかいいようがない。

風の魔術で宙に舞い上がることができたとしても、彼女のいまの靈気の量では、竜の翼で遊弋するほどの高度をとるわけにはいかないのだから。

「地上の旅は不便だが、この不便さも悪くないと、われは思う」

旅のさなか、少女はそんなことをいいます。なにげなく、おれの手を握って。

「おぬしの手は、温かいな。竜の身では想像もできなかったことだ」

「そ、そうか？」

「竜であったころのわれには、親の記憶すらなかった。ある日、卵から孵り……そのときからすでに、己がひとりで生きるための術を理解していた。竜は完全にして無欠の生命よ。ゆえに、孤独であった。その命が尽きるときまで、孤独であり続けた。孤独であることが辛いとは思わなかったが、それはこのぬくもりを知らなかったがゆえのことと、いまなら断言できる」

少女は、空をみあげていた。

いまはもういない、コガネの知らない誰かの姿をみているような気がした。

それはおそらく、アイシャというヒトの子として生まれた女の記憶で……。

「父も、母も、兄も、妹も。温かい手の持ち主であったよ」

ぼつりと、そう呟く。

だからこそ、なのかとおれは考える。

いまは亡き親兄弟との思い出に囚われているのは、それが前世の彼女にとって絶対に得られなかったものだからこそ、なのか。

「たしかに、われは苦しんでいる。だが、それでもこの苦しみが、いまのわれには嬉しい。

ヒトの生の、なんと色鮮やかなことよ」

「無理してないなら、いいけどな。キツくなったら、いつでもいえよ。急ぐ旅じゃない。

いちど休むのもいいだろう」

ミルがいま、どうしているのかは気になるところだ。

ほかの仲間のことも。

そもそも五百年待ったのだ、いまさら数日違ったところで、どうということはあるまい。対して、この少女はどうだ。

十五歳の誕生日に記憶が戻り、その日に親兄弟を皆殺しにされていたという。彼女にあっては、それからまだ十日と少しなのである。

「よいのだ。われとしては、いまだ我慢のならぬことがあるゆえな」

「我慢できないことって、なんだよ」

「いつまでも、おぬしに守られていることだ」

ああ、とおれはうなずいた。

道中で魔物をなぎ倒すのは九割がた、おれだ。

アイシヤは、いくらか靈気がかさ上げしているとはいえ、もとが軟弱な貴族令嬢で、まともに使えるのが風の第三階梯まで。

こんな秘境の魔物と正面からぶつかりあうのは、いささか無謀だろう。

ただ逃げるだけなら簡単だろうし、おれのサポートとしては充分、役に立ってくれている。

険しい山や峡谷を軽々と飛び越えられるのも、彼女の魔術あつてのことである。

ピンクスパイダー・シルクの靈衣をまとったおかげで、彼女の魔術の精度は大幅にあげついていた。

ふたりで手を繋いだまま、かなりの時間、飛行することが可能となっている。おかげで

難所続きの旅は、思った以上にさくさく進んだ。

「適材適所、だろう」

「理性では、そうわかっているのだがな。もつとちからを、と竜としての心がそう叫んでおる」

「めんどくせえな、竜としての心」

なんだと、と激昂された。

うるせえ黙れときゃあぎゃあ騒いでいると、魔物が束になって襲ってきたので、それを撃退しているうちに喧嘩の原因など忘れてしまった。

そうこうするうち、さらに数日が経った。

シルダリ教国にたどり着いた。